



田 薬 師 古 墳

滋北台第二団地造成に伴う発掘調査報告



86. 3



育 委 員 会



## 序

本書は、島根県教育委員会が島根県住宅供給公社の依頼を受けて実施した、岡田薬師古墳の発掘調査報告書です。岡田薬師古墳は、昭和59年9月、浜北台第二団地造成工事中に偶然発見されました。この年は、8月に荒神谷遺跡で358本の銅剣が発見されるなど、非常に多忙で対応も難しい状況ではありましたが、崩壊の危険もあり、即座に調査を行ったものであります。

工事中不時発見という厳しい状況の中で、決して十分な調査ができたとはいえませんが、特異な形態の横穴式石室が発見されるなど、未解明な部分の多かった湖北地方の古墳時代後期を考えるうえで、大きな成果をあげることができました。今後、この調査結果が、地域の歴史の解明と文化財の活用の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対して多大な理解と協力をいただいた、島根県住宅供給公社をはじめとする関係各位、および地元の方々に深く感謝し、御礼申し上げます。

昭和61年3月

島根県教育委員会

教育長 栗 栖 理 知



## 例 言

1. 本書は、島根県教育委員会が島根県住宅供給公社の委託を受けて実施した、瀬北台第二団地造成予定地内岡田薬師古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	島根県教育委員会
事務局	文化課長 美多定秀、同課長補佐 永瀬忠治、蓮岡法暉、文化係長 矢内高太郎 埋蔵文化財第二係長 石井悠
調査員	川原和人（文化課文化財保護主事） 丹羽野 裕（島根県住宅供給公社主事、現 島根県教育文化財団文化財主事） 片岡詩子（同嘱託）
調査指導	山本清（島根県文化財保護審議委員） 池田満雄（同）
調査協力	家川淳一（岡山大学大学院生） 佐藤英俊（島根県住宅供給公社）
3. 盛土および石室石下粘土層の残留磁気測定を島根大学理学部助教授 時枝克女氏に、石室材の鑑定を島根大学教育学部教授 三浦清氏にお願いした。
4. 発掘調査に関しては、島根県住宅供給公社、(株)松江土建から多大な協力を得た。
5. 遺物の実測は江川幸子があたり、浄写は野田直美、丹羽野が行った。また遺物写真は丹羽野が撮影した。また遺物整理については石川良、青山善之の協力を得た。
6. 本書の編集、執筆は、川原と協議のうえ、丹羽野がこれを行った。
7. 本書に使用した標高はすべて海拔高で、方位はすべて磁北である。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 調査の結果	
I. 墳丘	5
II. 石室	12
III. 盛土内遺物	25
第4章 自然科学分野の分析	
時枝克安、河本直子、伏見良夫	
「岡田薬師古墳の墳丘版築状互層および石室敷粘土の残留磁気」	32
第5章 まとめ	36

## 挿 図 目 次

1図 岡田薬師古墳の位置と周辺の遺跡	2	15図 石室内出土玉類実測図1)	22
2図 岡田薬師古墳周辺の調査前の状況	5	16図 石室内出土玉類実測図2)	23
3図 岡田薬師古墳周辺の旧状	6	17図 盛土内遺物出土状況	25
4図 岡田薬師古墳調査前墳丘測量図	7	18図 盛土内出土遺物実測図	26
5図 岡田薬師古墳発掘後墳丘測量図	8	19図 墳丘版築状互層の断面と定方位試料採取位置	32
6図 墳丘断面図	9	20図 墳丘版築状互層の残留磁気の方	33
7図 墳丘東掘出土遺物実測図	11	21図 石室の敷粘土の残留磁気の方	33
8図 石室・石室周辺土層実測図	13	22図 残留磁気ヒストグラム	34
9図 石室根石、掘り方実測図	16	23図 石室内・盛土内出土蓋環	36
10図 石室実測図	17	24図 石室・墳丘築成1段階模式図	38
11図 石室内遺物出土状況	19	25図 石室・墳丘築成2段階模式図	38
12図 石室内土層断面図	20	26図 石室・墳丘築成3段階模式図	38
13図 石室内出土須恵器実測図1)	21	27図 石室・墳丘築成4段階模式図	39
14図 石室内出土須恵器実測図2)	22		

## 表 目 次

表1 岡田薬師古墳周辺の遺跡	3	表4 墳掘出土須恵器観察表	28
表2 管玉計測表	22	表5 石室内出土須恵器観察表	29
表3 石室内出土小玉計測表	23	表6 盛土内出土須恵器観察表	30

## 第1章 調査に至る経緯

島根県住宅供給公社（以下、公社とする。）は、昭和56年、松江市法吉町の浜北台団地北側水田および丘陵の一部を対象に、浜北台第二団地の造成を計画、翌年8月、島根県土地利用調整会議に造成計画を提出した。造成予定地内に周知の遺跡は存在しなかったものの周辺の遺跡分布状況から、予定地内に遺跡が存在する可能性が強かったため、島根県教育委員会（以下、県教委とする）は、公社に対して遺跡の有無の確認調査を行うよう指示した。

それをうけて、公社は昭和58年9月17日、県教委に分布調査を依頼、同年11月に県教委は造成予定地内の踏査を行った結果、同地内に遺跡は確認できなかった。なおも慎重を期すために、水田部および丘陵裾部を中心に試掘を行ったが、遺構、遺物ともみとめられなかった。この調査結果をうけて、公社は同年より造成工事を開始した。

翌昭和59年9月17日、公社より県教委へ、第2浜北台団地造成地内で、大形の板石が造成中に出土したとの連絡があった。そこで、9月19日、県教委調査員が現地調査を行ったところ、重機により動かされた、箱式石棺の蓋石もしくは、小形の石室の天井石と考えられる石材を確認し、さらに周囲の重機によって削られた断面の観察により、人工的な盛上が行われていることが明らかになった。それらの事実から県教委はこれを古墳と断定し、遺跡発見届の提出を指示するとともに、即座に公社と対応の協議を行った。その結果、古墳の二辺が既に高さ10m以上にわたって、垂直に近い角度で削られて崖になり、古墳が崩壊する危険があったことや、工事中の不時発見であったことなどから早急に発掘調査を行う必要があると判断され、9月21日より県教委が発掘調査を行った。

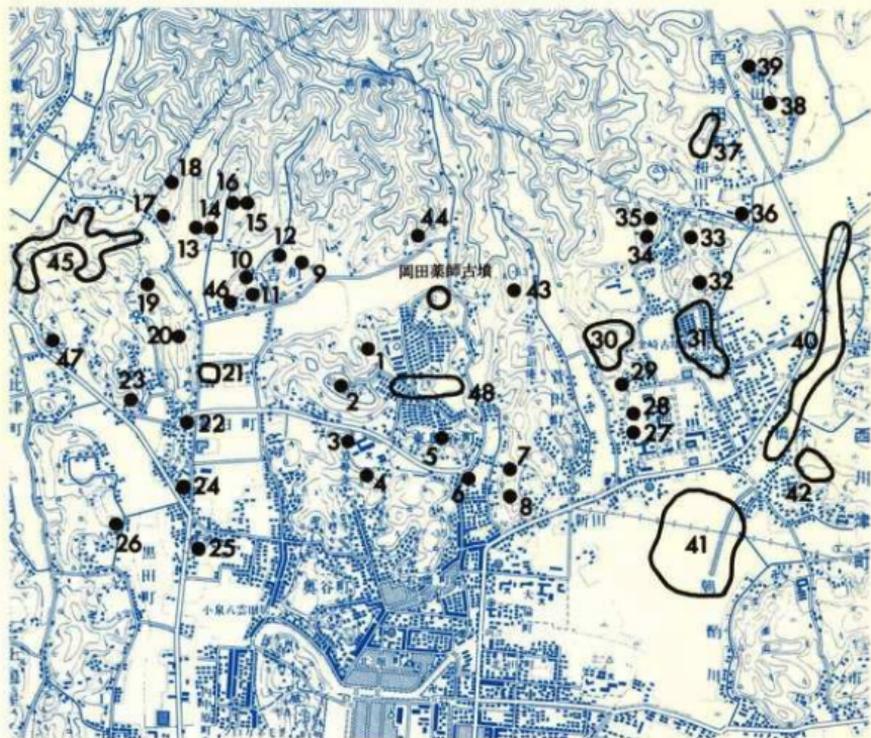
調査は当初、3週間程度の期間を予定していたが、発掘がすすむにつれて、主体部が横穴式石室で、比較的残存度が良いことや墳丘が版築状に互層につき固めていたことなど、複雑な様相が明らかになり、調査は大幅に遅れて10月31日に終了した。

なお、整理、報告書作成作業については、県教委が他事業との関連などから、昭和59年度には対応できなかったため、翌昭和60年度事業として公社と委託契約を結び行った。

## 第2章 位置と歴史的環境

岡田薬師古墳は松江市の北郊低丘陵上(標高30~40m)の松江市法吉町886番地、通称岡田山に存す。北側正面には、戦国期のいわゆる尼子十旗の一である白髮城のあった白鹿山(標高151m)をのぞみ、その背後には真山(標高256m)がそびえる。北側眼前には西方にのびる比較的大きな谷が広がり、水田として利用されていた。現在は市街地のドーナツ化現象により開発がすすみ、この周辺の丘陵や水田の多くが宅地化しつつある。

さて、この岡田薬師古墳の周辺には数多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡としては、本古墳から低陵をはさんで東側の沖積地に、西川津遺跡、タテチョウ遺跡が知られ、ともに早期から



第1図 岡田薬師古墳の位置と周辺の遺跡 S=1/25,000

晩期にかけての遺物が出土している。弥生時代になると前記の西川津、タテチョウ両遺跡で引きつづき集落が営まれるほか、本古墳西方の法吉遺跡においても弥生土器が出土している。

古墳時代には、前記の各遺跡で集落が営まれる。一方古墳についてみると、前期古墳は、この周辺では明確なものは知られていないが、本古墳北西約3kmの八東郡鹿島町講武平野南縁丘陵上には、奥才古墳群が存在する。奥才古墳群は古墳時代前期後半から後期前半にかけての7支群50余基にわたる古墳群で、主体部としては、箱式石棺や素掘りの土壇が検出されており、その棺底部には礎が敷かれるものも多く認められる。うち13号墳(23×19mの方墳)14号墳(径18mの円墳)が最も大形で、最も古式の様相を示すものである。ともに箱式石棺2基を主体部とし、14号墳からは銅鏡2面と素環頭大刀、槍、剣などの鉄器類、碧玉製紡錘車等が出土しており、古墳時代前期後半に築造されたものと考えられる。

表1 岡田薬師古墳周辺の遺跡

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
1	栗元横穴		25	法吉小学校裏山横穴群	消滅
2	栗元古墳	円墳	26	春日遺跡	弥生土器
3	煙硝倉古墳	消滅	27	薬師山古墳	箱式石棺・鏡・鉄器等消滅
4	古山墳	方墳	28	菅田丘古墳	前方後方墳、全長30m、磨擦
5	ひのさん山横穴群	30穴以上、3/5消滅	29	小丸山古墳	方墳25×25m、埴輪
6	桜崎横穴	扇子形石棺	30	菅田丘古墳群	方墳10、不明1
7	赤崎横穴	須恵器	31	金崎古墳群	前方後方墳2、方墳9
8	切通横穴	人骨、消滅	32	福山古墳群	方墳3基
9	古墳	方墳	33	古墳	方墳
10	吉岡兵之助宅前古墳	円墳	34	深町古墳群	円墳2基 埴輪
11	山楨第1号墳	円墳	35	深町横穴	須恵器・人骨 消滅
12	山楨第2号墳	円墳	36	古墳	円墳
13	塚山古墳	円墳径30m、埴輪	37	宮垣古墳群	方墳5 円墳1
14	下り松遺跡	弥生土器、須恵器	38	大瀬古墳	円墳径30m 埴輪
15	依半半部北重命御陵古墳	円墳径20m	39	尾山横穴群	2穴
16	新宮古墳	円墳径25m、石室	40	西川津遺跡	縄文土器・弥生土器・土師器他
17	曾田虎一郎宅上古墳群	円墳2基	41	タテチョウ遺跡	*
18	下り松竈跡	須恵器	42	馬込山古墳群	方墳3 円墳1
19	古墳群	方墳3基	43	松ヶ崎古墳	円墳径36m
20	唐梅古墳群	方墳4基	44	なつめ谷荒神古墳	円墳径17m
21	法吉遺跡	縄文土器・弥生土器・土師器	45	月廻古墳群	21基・石棺・礎床等、竜虎鏡他
22	中代遺跡		46	松崎全一郎所前山林古墳	円墳径12m
23	比津が崎横穴群	消滅	47	ひゃくだ横穴	冢形石棺 消滅
24	摩利支天山横穴		48	折廻古墳群	5基、箱式石棺等、壺・須恵器他

古墳時代中期から後期にかけては、本古墳周辺で数多くの古墳が築造される。本古墳西方約1.5kmの低丘陵上には、21基からなる月廻古墳群が存在した。この月廻古墳群は多くが方墳で、箱式石棺や礫床をもつ木棺等が検出されており、竜虎鏡などが出土している。一方本古墳の東方、低丘陵をはさんで約1kmの丘陵には、金崎古墳群、薬師山古墳、菅田丘古墳など、5世紀代の比較的大形の古墳が築かれる。金崎古墳群は前方後方墳2、方墳9からなる古墳群で、1号墳(全長32mの前方後方墳)は竪穴式石室をもち、山陰須恵器編年Ⅰ期の須恵器とともに鏡、鉄器類、ガラス玉類が出土している。薬師山古墳は、主体が箱式石棺と考えられ、Ⅰ期の須恵器とともに鏡、鉄器類、有孔円盤等が出土している。菅田丘古墳は全長約30mの前方後方墳で長さ2.5mの礫床をもつ。

6世紀前半代になると、本古墳と同丘陵南側に折廻古墳群が築かれる。これは5基の古墳からなるもので箱式石棺をもつものがあり、櫛等が出土している。また前記の奥才古墳群1号墳ではⅡ期の須恵器が伴って、長さ3.15mの竪穴式石室が検出されており注目される。

6世紀後半以降になると、この周辺では数多くの横穴墓が築かれるようになる。本古墳の存する同一丘陵南側のひのさん山横穴群では、30穴以上の横穴が集中して検出されている。横穴式石室については、本古墳周辺では明確なものは知られていないが、北東約7.5kmの坂本町には全長約50mの前方後方墳で2つの横穴式石室をもつ薄井原古墳が存在する。また本古墳の北東約2.5kmの持田町周辺では、「石棺式石室」をもつ古墳が集中しており、注目される。

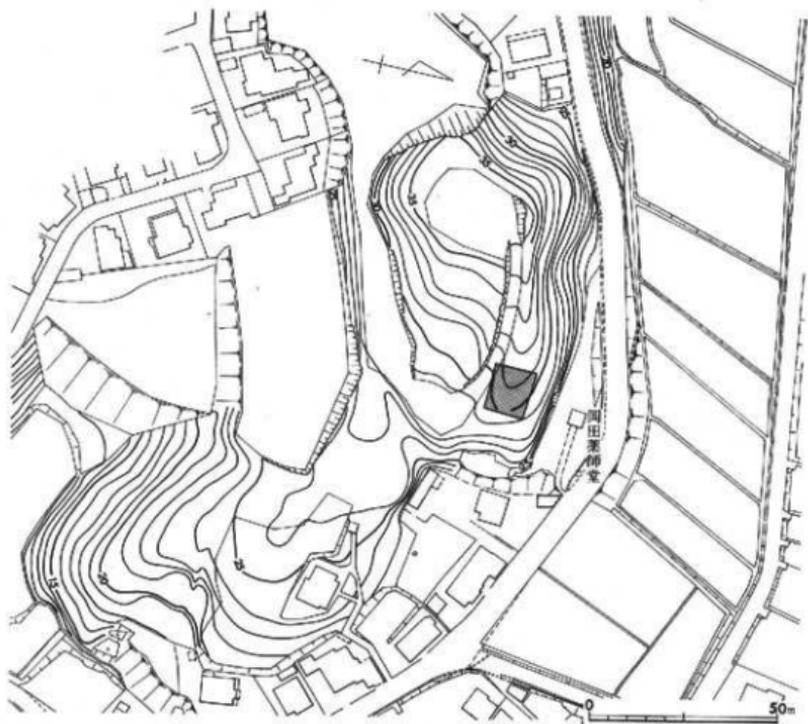
## 註

- (1) 島根県教育委員会 「西川津遺跡発掘調査報告書 Ⅰ」 1980
- (2) 島根県教育委員会 「タテチョウ遺跡発掘調査報告書」 1979
- (3) 鹿島町教育委員会 「奥才古墳群」 1985
- (4) 松江市教育委員会 「史跡金崎古墳群」 1977
- (5) 山本清 「山陰の須恵器」 『山陰古墳文化の研究』 1971
- (6) 山本清 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」 『島根大学論叢(人文科学) 5』 1955
- (7) 山本清 「島根大学敷地菅田丘古墳について」 『山陰文化研究紀要』 第17号 1977
- (8) 島根県教育委員会 「薄井原古墳調査報告」 1962
- (9) 山本清 「古墳の地域的特色とその交渉 —山陰の石棺式石室を中心として—」 『山陰文化研究紀要』 第5号 1964

### 第3章 調査の結果

#### I 墳丘の調査

**調査前の状況** 真山、白鹿山の南裾の、西に向けて開く谷の最奥部に面す丘陵尾根端部に岡田薬師古墳は存在する。かつて、この古墳の南側と西側には、丘陵が連なり、(第3図) 少なからぬ古墳が存していたが、現在は削平され浜北台団地となっている。こうした状況の中で、岡田薬師古墳とその周辺のおずかに残された丘陵は、宅地と水田に囲まれて残存していたが、(第2図) 昭和59年の浜北台第2団地造成工事により、古墳の南側と東側の丘陵がさらに削りこまれ、本古墳の発見に至った。



第2図 岡田薬師古墳周辺の調査前の状況

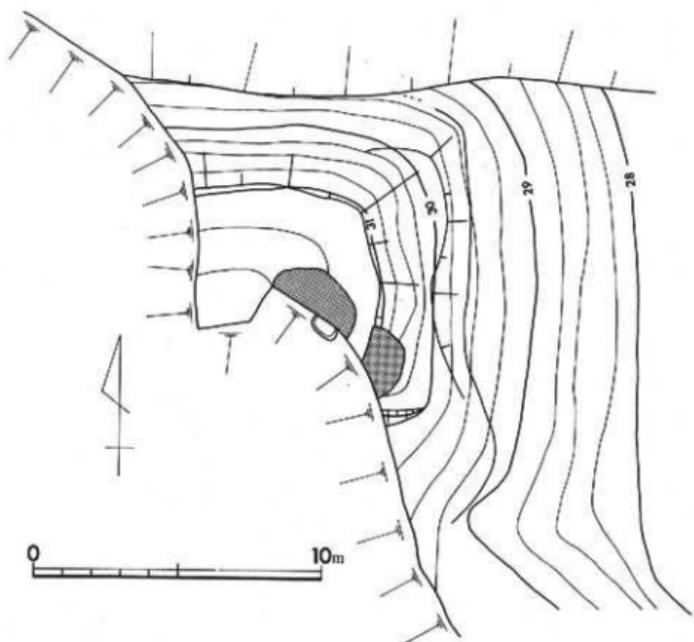


第3図 岡田薬師古墳周辺の旧状

発見時の状況は次のとおりである。墳丘の西辺全体と南辺の大部分が造成工事により削られ、高さ10m以上にわたって崖状になり、北辺は下方の岡田薬師堂建造の際に裾部分が削られていた。辛うじて残存していた東辺部分の観察により、裾部分がほぼ直線をなしていることから方墳と判断され、わずかに残る南辺と削られた北辺の推定から、一辺10m強の規模と考えられた。東辺裾外方には、若干の平坦面が広がり、その下方は耕作により段状に削られ、さらに下方は現在墓地となり、大きく削平されている。削られた南辺付近、および北辺の崖部分より須恵器壺、子持壺片が表採された。

**墳丘の調査** 発掘により、東辺および南辺の一部の墳端と、東南隅を検出することができた。それによると、南北辺長が約12mと考えられるが、墳丘のあり方からみて東西辺が若干長くなると推定され、長方形の墳丘であったと考えられる。墳丘の高さは、東側裾より2.4mを測る。墳頂部は、削平のため詳細は不明だが、東西辺5m以上の比較的広い平坦面をもっている。

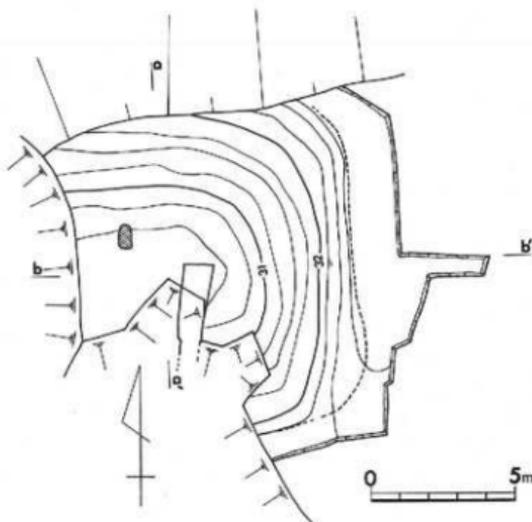
墳丘は盛土と地山整形により築成している。盛土は、墳頂の東縁付近で約1.5m西端で約0.9mをはかる。これは、原地形が東から西に向かって高くなっていることによるもので、地形を利用して墳丘を築いたことがうかがえる。また東側斜面と北側斜面には旧表土が残っており原地形の頂上付近



第4図 岡田薬師古墳調査前墳丘測量図

は、若干削って整地した後に盛土を行ったと考えられる。

盛土は、断面上層観察によりおむね以下のような手順で行われたと考えられる。まず石室を積み上げながら、その周囲に石室の天井の高さまで土を盛り土鏡頭状にする。その際、盛土は黒色土、黄褐色粘土、赤褐色土を交互にうすく積み上げるように行っている。その後、天井石の高さでそろえるように土鏡頭状の盛土周囲の低い部分に土を盛り、平坦面をつくる。最後に約50cmにわたってその上に赤褐色土を盛り墳丘を完成させて



第5図 岡田薬師古墳発掘後墳丘測量図

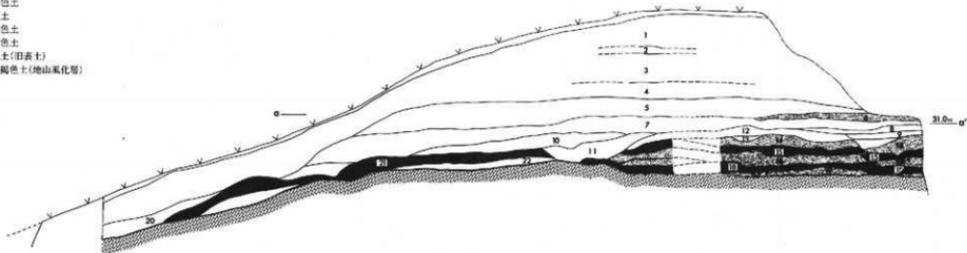
いる。なお石室の構築と盛土との関係については、第5章で詳細に記したい。

**墳丘裾付近出土遺物** 墳丘東辺の裾から墳丘外平坦部にかけて、多くの須恵器片が出土した。東辺裾付近のほぼ全域から出土しているが、特に北側コーナーに近い部分より集中して見られた。器種は、子持壺、蓋、甕で、それぞれ2個体以上出土している。いずれも小片で出土しているが、これらが墳裾に据置樹立していたものか、故意に破砕されて撒かれたものかは明らかにしえなかった。

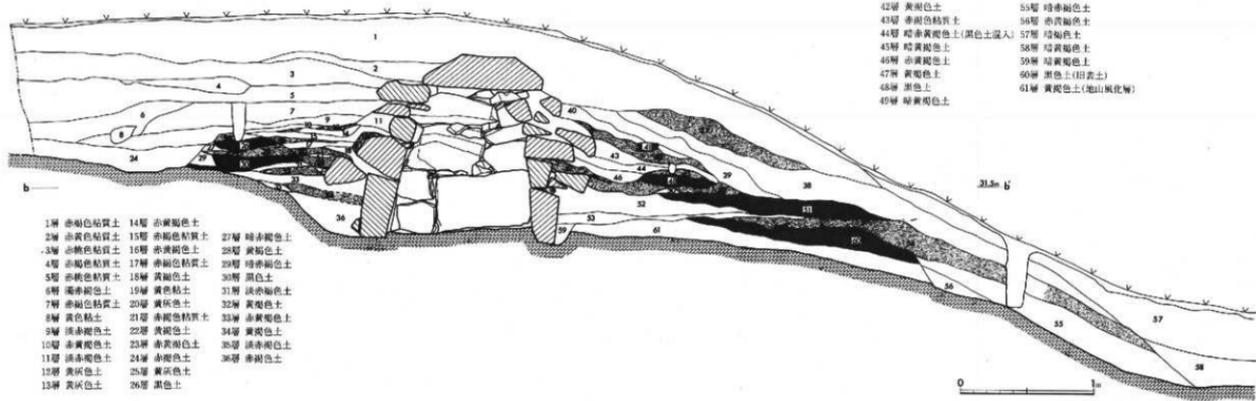
**遺物 甕 (第7図1~3)** 1は口径20cmを測る比較的大形の甕で、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁付近で外反する。口縁端部は外側にやや肥厚させ、その外面を凹線状に凹ます。胴部は大平が失われているが、最大径が若干上方にあるものと考えられる。肩部付近までは自然釉がかり杯の底部と考えられる須恵器片が多く付着している。2は甕の底部で、内面にはリング状に自然釉が残っている。1と同一個体の可能性がある。3は1より頸部が長く大形の甕である。

**子持壺 (4~6)** 少なくとも2個体以上の子持壺が出土しているが、完形に復元できるものはなかった。4は胴部から脚部にかけての破片で頸部以上と脚部下半が失われている。胴部は最大径が中央よりやや上位にあり、下半は次第に厚みを増しながら脚部につながる。調整は、内面が同心円タタキ、外面は平行タタキの後カキメを施している。肩部付近には、現状で2個の子壺が付属しているが、子壺間の長さから推定して5個の子壺が付属していたものと考えられる。子壺は直径4.5~5cmの胴部に大きく外方に開く口脛部が付くもので、外面の裝飾はない。脚部はほぼ垂直に下り粘土紐の輪積みにより成形している。内面はヨコナデを行っているが、ていねいではなく、粘土接合

- 1層 赤褐色粘質土
- 2層 赤黃色粘質土
- 3層 赤褐色粘質土
- 4層 赤褐色粘質土
- 5層 赤褐色粘質土
- 6層 黃灰色土
- 7層 赤褐色土
- 8層 赤灰色土
- 9層 赤褐色土
- 10層 暗赤褐色土
- 11層 暗赤褐色土
- 12層 暗赤褐色土
- 13層 赤褐色土
- 14層 黃褐色土
- 15層 黑色土
- 16層 黃褐色土
- 17層 黃褐色土
- 18層 黑色土
- 19層 赤褐色土
- 20層 赤褐色土
- 21層 黑色土(田舎土)
- 22層 暗黃褐色土(地山風化層)

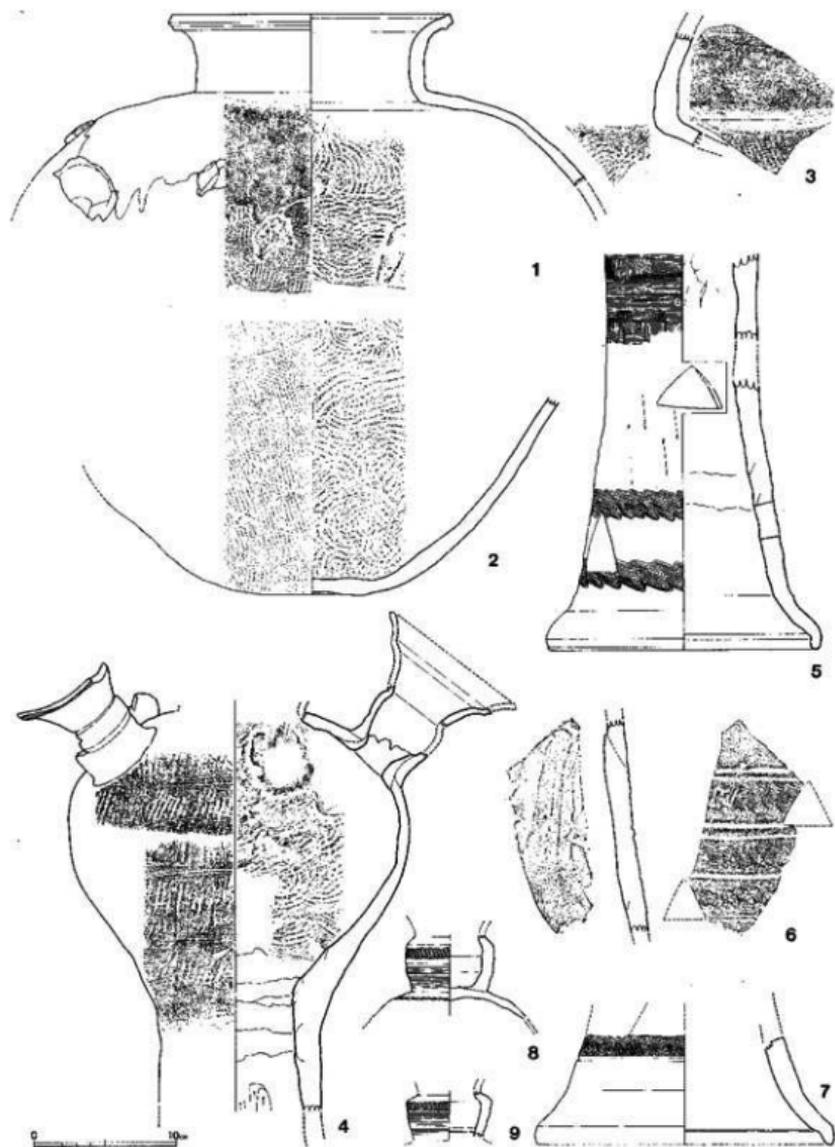


- 27層 暗黃褐色土
- 28層 赤褐色粘質土
- 29層 赤黃褐色土
- 30層 赤褐色粘質土
- 31層 黑色土
- 32層 黃褐色土
- 33層 赤褐色粘質土
- 34層 暗赤褐色土(黑色土混入)
- 35層 暗黃褐色土
- 36層 赤褐色土
- 37層 暗黃褐色土
- 38層 赤褐色土
- 39層 暗赤褐色土
- 40層 暗赤褐色土
- 41層 暗赤褐色土
- 42層 暗赤褐色土
- 43層 暗赤褐色土
- 44層 暗赤褐色土(黑色土混入)
- 45層 暗黃褐色土
- 46層 赤黃褐色土
- 47層 黃褐色土
- 48層 黑色土
- 49層 暗黃褐色土
- 50層 赤褐色土
- 51層 黑色土
- 52層 暗赤黃褐色土
- 53層 赤褐色土
- 54層 黃褐色土
- 55層 暗赤褐色土
- 56層 赤褐色土
- 57層 暗褐色土
- 58層 暗黃褐色土
- 59層 暗黃褐色土
- 60層 黑色土(田舎土)
- 61層 黃褐色土(地山風化層)



- 1層 赤褐色粘質土
- 2層 赤褐色粘質土
- 3層 赤褐色粘質土
- 4層 赤褐色粘質土
- 5層 赤褐色粘質土
- 6層 暗赤褐色土
- 7層 赤褐色粘質土
- 8層 黃色粘土
- 9層 暗赤褐色土
- 10層 赤黃褐色土
- 11層 暗赤褐色土
- 12層 黃褐色土
- 13層 黃褐色土
- 14層 赤黃褐色土
- 15層 赤褐色粘質土
- 16層 赤黃褐色土
- 17層 赤褐色粘質土
- 18層 黃褐色土
- 19層 黃褐色土
- 20層 黃褐色土
- 21層 赤褐色粘質土
- 22層 黃褐色土
- 23層 赤黃褐色土
- 24層 赤褐色土
- 25層 黃褐色土
- 26層 黑色土
- 27層 暗赤褐色土
- 28層 黃褐色土
- 29層 暗赤褐色土
- 30層 黑色土
- 31層 暗赤褐色土
- 32層 赤黃褐色土
- 33層 赤黃褐色土
- 34層 黃褐色土
- 35層 暗赤褐色土
- 36層 赤褐色土

第6圖 墳丘断面図



第7圖 墳丘東掘出土遺物実測図 S=1/4

痕がそのまま残っており、下半はヨコナデの後、下方から強くナデ上げている。外面は上下方向の強いナデを施しており、胴部の平行タタキが脚部の一部にまで続いている。5は子持壺の脚部である。全体形は下方へわずかに裾広がりに広がり、脚部付近で「八」の字状に広がって脚端は下方に折り返し、端部は丸くおさめている。成形は輪積みによると考えられ、少くとも2段にわたって三角形の透かしを設けている。外面脚部付近には、下段の透かしをはきむように、櫛歯波状文が2列施され、上方の胴部近くには縦横にカキメを施している。外面には全般に回転ナデが施されるが、波状文上列の上方には一部施されていない部分があり、上下方向のヘラ削り痕が残っている。内面は脚端から裾付近まではいいねいな回転ナデを施しているが、その上方は粗い不整方向のナデ調整を行っている。全体のプロポーシオンや、上方の調整の違いから、4とは別個体と考えられる。6・7は同一個体と考えられる子持壺の脚部である。基本的なプロポーシオンは5とほぼ同様と考えられ、少くとも2段の三角形透かしがみられる。外面には1条ないしは2条の凹線にはさまれて、少くとも4列にわたり櫛歯波状文が施されている。内面は下半が回転ナデ、上半が上下方向の強いナデを施している。4と同一個体の可能性がある。

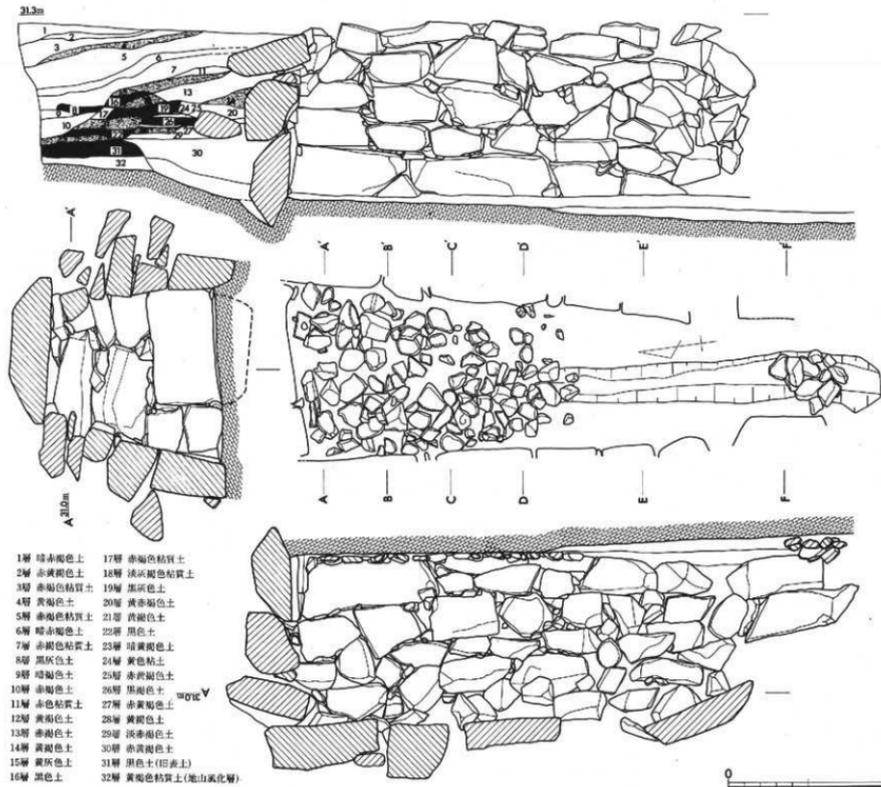
8は子持壺の蓋と考えられ蓋の天井部に龜形の小壺を接合したものである。蓋部天井と壺胴部には櫛状工具による刺突文を廻らし、胴部下半にはカキメを施している。9は子持壺の小壺もしくは蓋の破片である。肩部下方には櫛状工具による刺突を廻らし、その下方にはカキメを施す。

## II 石室の調査

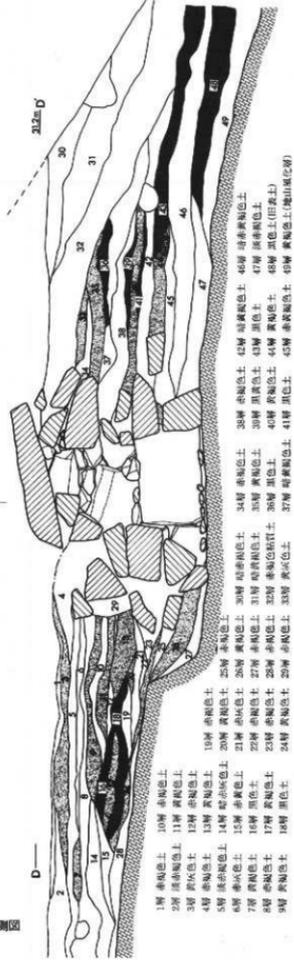
本古墳の主体部は、南北辺に平行して墳丘の東寄りに、ほぼ南向きに開口する（S8<sup>0</sup>-W）横穴式石室である。石室は緑灰色の流紋岩割石を積んで構築しており、調査時にはすでに羨道部入口部分が破壊され、天井石も数枚が失われていた。石室内には、天井石に密着するほど上砂が充填していた。調査は石室幅が一部で非常に狭まっていたため、天井石をまず取り外してから、内部の上砂を取り除く方法をとった。

**平面形・床面** 床面を基準にしての残存長が、比較的残りのよい左壁で3.31m、奥壁部で幅1.1mを測る狭長な石室である。左壁と奥壁は若干鈍角をなし、右壁と奥壁は若干の鋭角をなすため、床面での平面形は不正な長方形で、羨道に向かって幅が狭まり、入口残存部で幅0.6mを測る。基本的には無袖形で、明確な玄室、羨道の区別はないが、床面はほぼ中央部で奥壁側の敷石部分と、排水溝を設けた部分とに区分され、それが、玄室、羨道の区別を意識したものとも考えられる。また両側壁も、中央部分で大きく持ち送られ、天井部分で幅0.2mの狭さになり、天井石を取り外した時点での平面観は、中央部が狭まり、その奥壁側、入口側が広がる鼓形を呈す。（第8図）これは、明らかに玄室と羨道を区別することを意識した結果と考えられる。また後述するが、側壁の積み方もほぼ中央から奥壁側とで若干異っている。

敷石は、奥壁より1.8mにわたって敷かれており、石材は拳大～人頭大のやや角張った礫を利用し



第8圖 石室・石室周辺土層実測図



ている。礎の敷き方は、全体的にあまり密ではなく、特に右壁寄りには疎らである。奥壁に接した左壁寄りの2つの礎は、立てて置かれており、あるいは木棺等の据置位置に関連するものの可能性もある。

排水溝は、ほぼ敷石がなくなる部分から羨道入口に向かって掘られている。石室入口付近は破壊され不明だが、現存長は2.14m、幅は21～35cm、深さは4～9cmを測り、入口に向かって下に傾斜している。断面は浅い「U」の字形を呈す。入口付近には、排水溝を覆うように石が集中して検出された。これらの石は、石室奥に敷かれたものと同様の石で、溝の壁に添うように置かれているが、溝底からは若干浮いている。これらの石の性格は不明である。

**奥壁** 奥壁基底には、床面から高さ38cmの比較的大形の石を右壁寄りへ横に立てて腰石状に据えその左壁側にはやや小形の石を2個重ね、ほぼレベルをそろえている。なお大形の基底石は床面を約20cm掘り下げて据えている。その上は、今度は左壁寄りに大形の石を2個重ね、その右壁側には間を埋めるように、やや小形の石を小口積状に積み上げている。下から4段目(中軸上では3段目)の石は、持ち送り状にせり出しているが、これは側壁との間を強固にするための工夫である。各石の隙間には小形の割石を詰めて埋めている。奥壁部分での高さは1.04mを測る。

左壁との石組みの関係は、奥壁が左壁面に接して積まれているが、左壁3段目の石は一部を奥壁3段目の石にのせる形で積まれている。さらにその上には、奥壁4段目の大形の石をせり出させてのせ、たがいちがいに組み合わせで構築することにより、両壁面との関係を強化している。

右壁との関係は、左壁とのそれと同様、奥壁下から2段目(右壁3段目)までは奥壁が右壁面に接するように積まれている。その上方は2段にわたって奥壁の石をせり出させて右壁の上のせている。

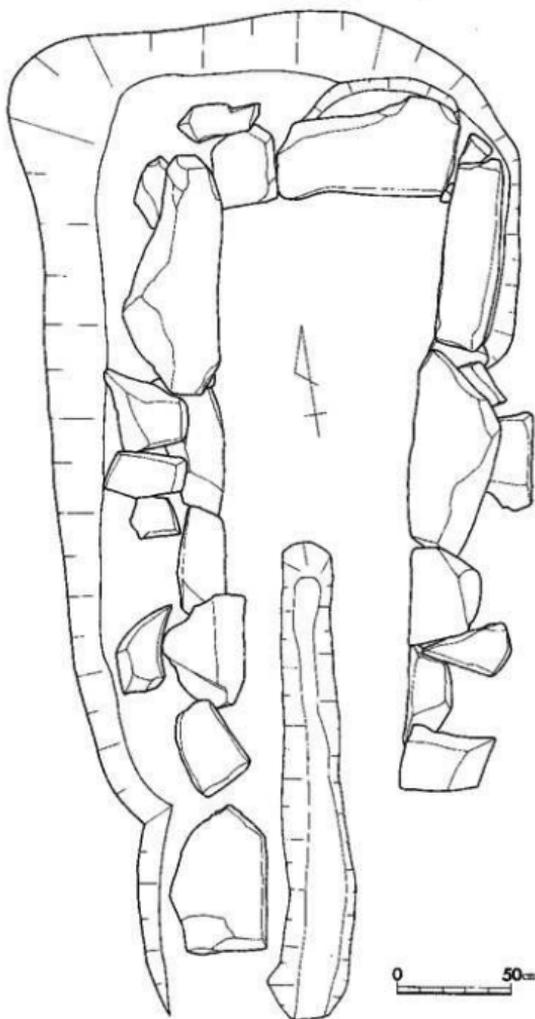
**左側壁(西壁)** 左壁は、全体にやや内傾して積み上げられ、特にほぼ中央部分は持ち送りにより、壁面が大きく内側にせり出している。これは前述のように、玄室、羨道を区別するために行われたと考えられる。基底の根石は、奥壁に接する部分には、やや大形の石を腰石状に据えているが、その他は上方の石と同様の大きさの石を用いている。特に中央付近では薄い石の小口部分を面にして据えており、これは、その部分で強い持ち送りを行うためと考えられる。奥壁寄り、および羨道部分の根石と、中央持ち送り部分の2段目とは、若干入口に向かって下に傾斜しながらも横に目地が通り、さらに奥壁の腰石のレベルともほぼ一致する。根石は、石室の掘り方を深さ約30～40cmにわたって掘った後、その掘り方の平坦面にほぼ直接据えており、持ち送りを行う部分には控え積を行っている。(第9図)

根石の上方は、基本的に幅30cm前後の石を横置きにして、煉瓦積み状に積んでおり、3段目(奥壁寄りおよび入口付近で2段目)でほぼ横に目地が通る。石の隙間には、持ち送り部分を中心に小形の割石を充填し、裏側には要所で控え積を行っている。上半部は石積がやや雑然となり、石と石の隙間もやや広がっているが、下半ほどはいいな詰石は行っていない。その傾向は、羨道部に

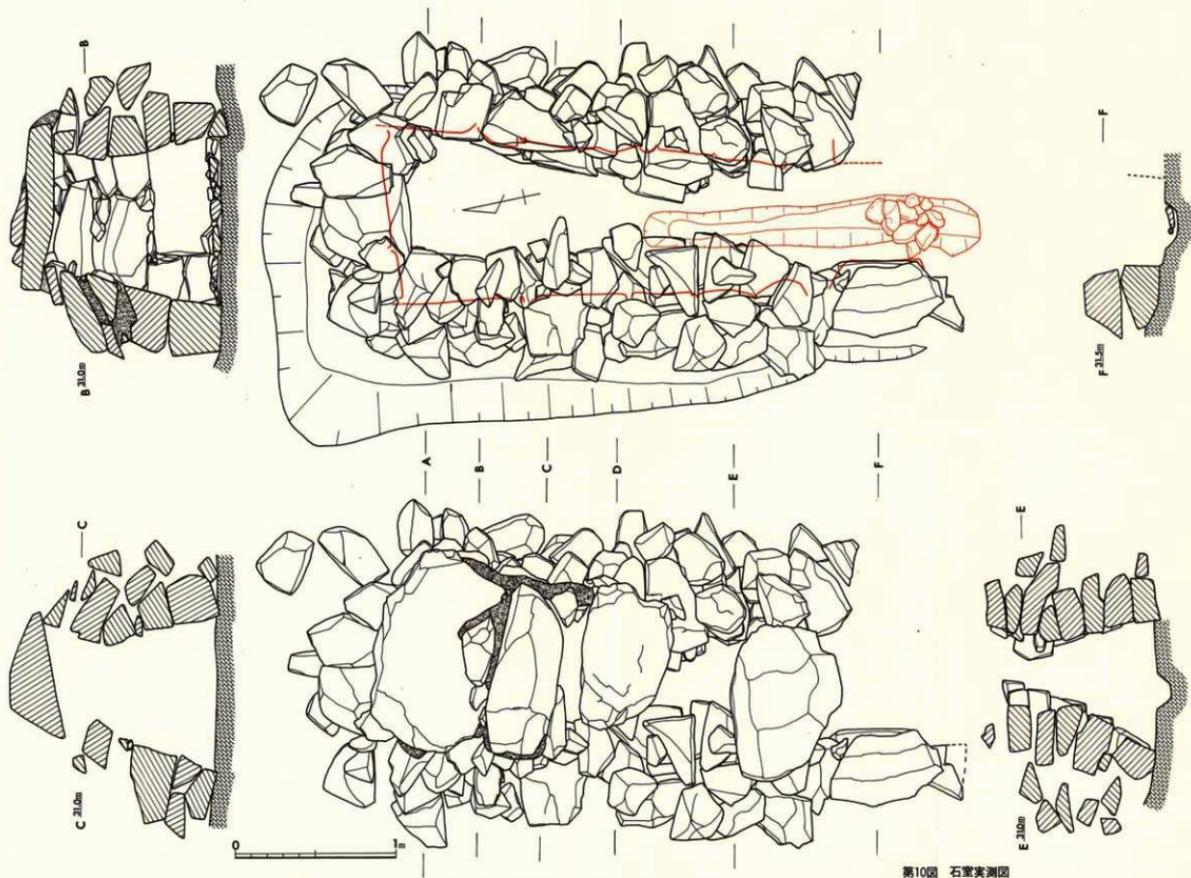
においてより顕著になる。天井部分での平面形は、中央付近で持ち送りをを行っているため、「く」の字形に屈曲しており、この屈曲部分で根石から43cm内側にせり出している。

**右側壁（東壁）** 右壁も左壁とほぼ同様の石積方法で、全体に内傾気味に積み、特に中央部分では持ち送りによって内側にせり出させているが、左壁に比すと持ち送りの割合は少ない。根石は、玄室部分で比較的大形の細長い石を使い、床面を掘り窪めて横置きに据えている。底が不安定な根石の下には、固定のため裏込め石を置いている。

石の積み方は、玄室部分（中央持ち送り部分より奥壁側）と羨道部分（持ち送り部分より入口側）では若干異っている。玄室部分では根石上に、幅約30～50cmの中形の石材を横置きに積み重ね、煉瓦積状にしており、各石の隙間には小形の石を充填している。一方、羨道部分では、玄室部分とは異って不定形の中形の石材を、不規則に積み上げている。その結果、各石間の隙間が大きくなっているにもかかわらず、小形の石の充填もほとんど行われていない。壁体の裏側には、左壁と同様、要所に控え積みを行なっている。

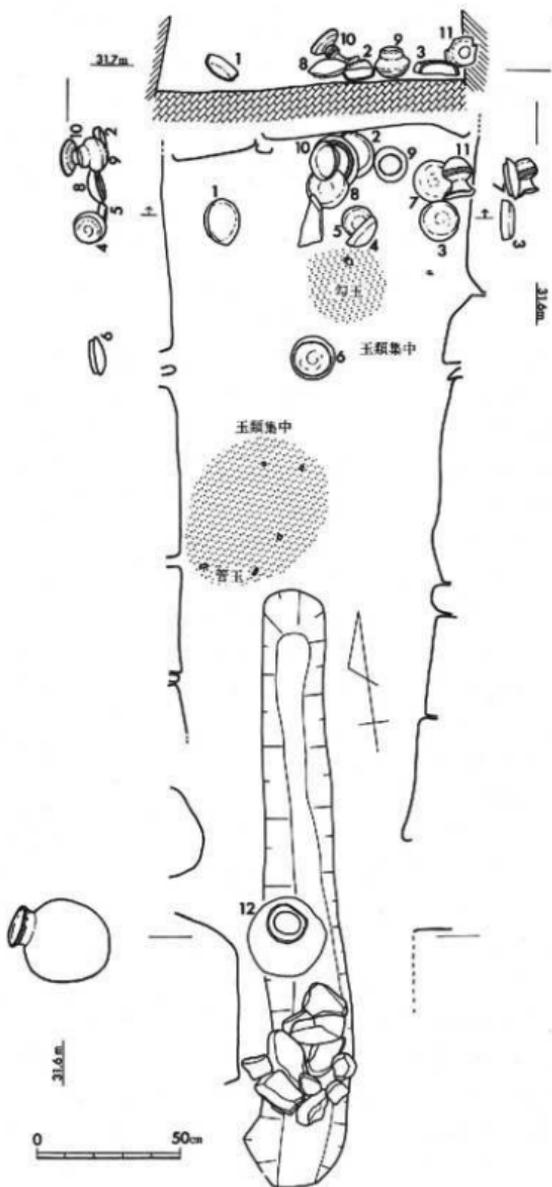


第9図 石室根石、掘り方実測図



第10圖 石室美測圖

**天井石** 天井石は大形の板石を利用しており、4枚検出したが、最も南側（入口側）の石は、明らかに重機によって移動させられたものである。石室の長さや、入口付近の破壊状況から判断して、もとはあと数枚の天井石が存在していたものと考えられる。原位置を保つ三枚の天井石は、最も北側（奥壁側）の石が最も大形（長幅1.24m×短幅0.79m）で入口に向かって次第に小形の石を利用している。これは、石室側壁上面が奥壁から入口に向かって次第に狭まっているのに対応している。奥から2枚目の天井石は、厚さが32cmと厚く、最奥の天井石との間には小形の石を積み、さらに黄色の粘土により目張りを行っている。またこの2枚の天井石と、各壁の石の隙間にも要所に同様の黄色粘土を充填している。こうしたいいいな目張をしているにもかかわらず、奥から2枚目と3枚目の天井石の間には、11~14cmの隙間があり、これが石室内への多量の土砂の流入をも



第11図 石室内遺物出土状況

たらしたと考えられる。なお、羨道部分の天井石は失われているが、両側壁のあり方からみて、天井石は奥壁から入口までほぼ同じレベルで架橋されていたと考えられる。

**掘り方** 掘り方は左壁（西壁）の西側から奥壁の北側にかけて、浅く（30～40cm）掘り込んで、石室構築のための平坦面を作り出している。右壁（東壁）側には各根石を据えるための掘り込みはみられるものの、大きな掘り方はみられない。これは原地形が東側に向けて低くなっていることによる。

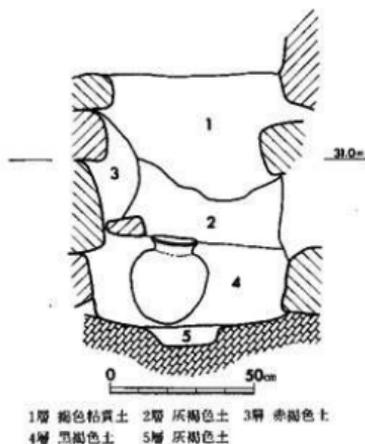
**遺物出土状況** 石室内には、盗掘の痕跡もなく須恵器、玉類が原位置と考えられる位置で出土している。玄室部分ではほぼ敷石に接して奥壁付近を中心に須恵器が集中して出土した。右壁にほぼ接する部分には蓋杯が1セット置かれ、その上に甕が倒れた状態でのっている。奥壁のほぼ中央部付近には、まず蓋が置かれ、その上に子持壺の蓋（蓋に小形の甕を接合した形）が逆転して高杯状に据えられており、さらにその口縁部分に重なるように坏身が置かれている。そしてそれらの右壁寄りに接して短頸壺が、そして羨道側に蓋2点が1点を立てるようにして置かれている。また、奥壁、左壁のコーナー付近からやや離れて、蓋1点が立てるように置かれ、さらに玄室部分のほぼ中心部に坏身1点が置かれていた。

一方、玉類は、奥壁中央付近須恵器群のやや羨道側より水晶製勾玉が1点とガラス小玉が出土し、玄室部分（敷石部分）の羨道との境付近左壁寄りから碧玉製管玉、水晶九玉、ガラス小玉類が集中して出土している。なお、玄室部分の遺物出土状況からは、追葬や埋葬位置などを推定することはできなかった。

羨道部分からは須恵器甕が1点出土している。この甕は排水溝が埋まった後に置かれており、追葬に伴う可能性が大きい。またその丸底でありながらしっかりと正位に固定した掘り方から考えて、周囲を土砂で埋めて据えたと考えられ、土層の観察によると、口縁付近まで土砂で埋めていた可能性もある。(第12図)

**遺物 須恵器** 蓋は5点出土しており（1～5）1～4は坏蓋、5は短頸壺等の蓋である。

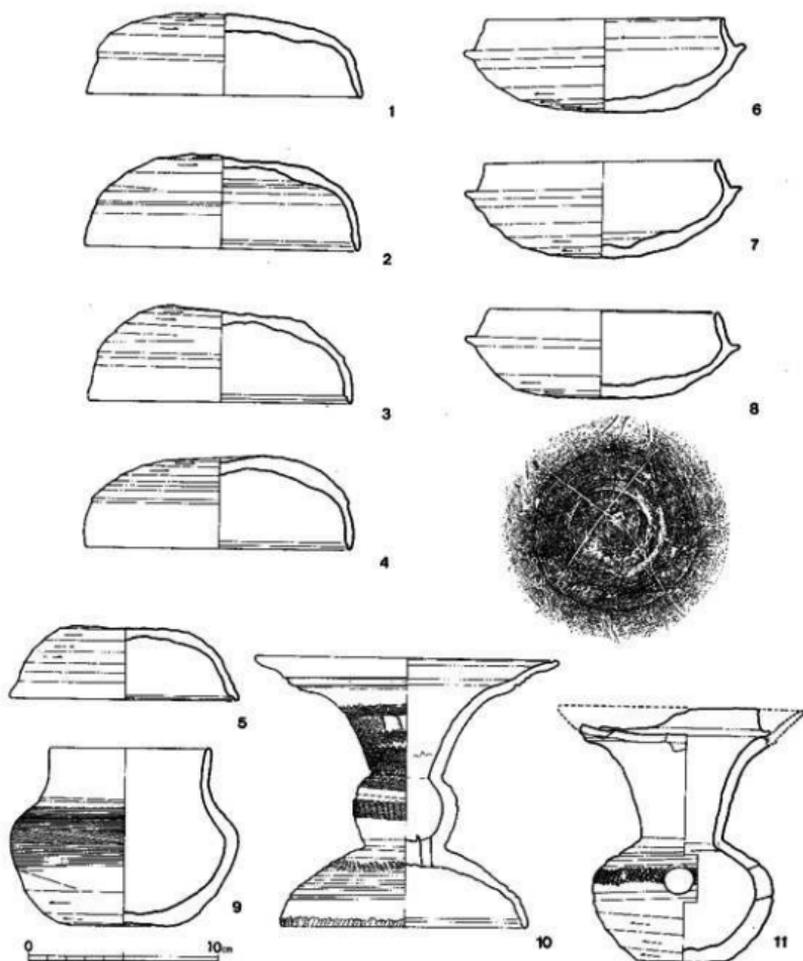
坏蓋はそれぞれ若下の個体差はみられるもののほぼ同様の形態、手法をとっている。口径は14～14.5cmで、天井部は丸く、その上半には回転ヘラ削りを施す。天井部と口縁部との境にはわずかながらも段を有し、その下方は凹線状に凹ませている。なお1は段を設けた後回転ナデを施しているため、また2は焼成後の磨耗等によりいずれも段がやや不明瞭となっている。口縁はわずかに外方に下り



第12図 石室内土層断面図

口縁端内面には浅い沈線を施す。5は天井部と口縁部との境がなく、口縁端付近でわずかに外方へ開く。外面上半にはヘラ削りを施し、口縁端内面には浅い沈線を入れる。

环身(6~8)も蓋と同様に、基本的には同じ作りをしている。底部は丸く、外面下半には回転ヘラ削りを施す。立ち上がりの高さは1.4~1.6cmと比較的高く、やや内傾して立ち上がる。6は蓋



第13図 石室内出土須恵器実測図 (1) S=1/3

1とセットになると考えられる。

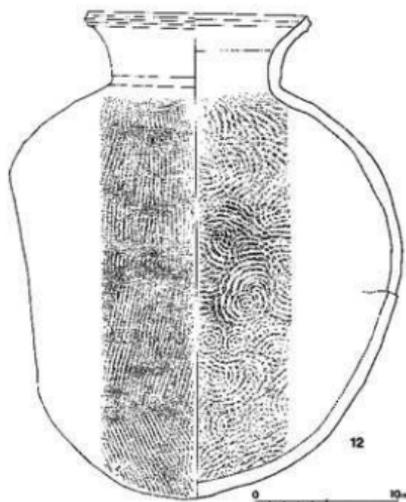
短頸壺(9)は、体部最大径がやや上位にあり、口頸はほぼ垂直にのびる。体部下半は回転ヘラ削り、上半にはカキメを施す。

10は装飾性の強い子持壺の蓋で坯蓋の天井部に彫形の蓋を付属させた形態をとり、蓋部天井から壺部底部へ径約5mmの孔が焼成前に穿たれている。蓋部は、天井部と口縁部との間に2本沈線を入れ、口縁部は外方に開きながら下る。口縁端面には沈線、外面にはヘラ状工具による刺突を施し、さらに天井外面には櫛状工具による刺突文を施す。壺部は径5.6cmの小形の体部に大きく逆「八」の字状に開く口頸をもつ。くびれ部にはヘラ状工具による刺突が施され、体部外面と頸部外面には櫛状工具による波状文が施されている。

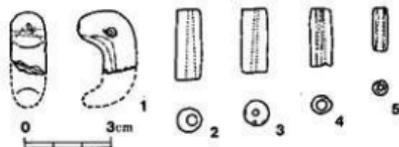
壺(11)は、平底で若干胴張りのする体部を持ち、下半には回転ヘラ削りを施す。体部ほぼ中央の凹線間には、櫛状工具による刺突文を施す。12は器高34.6cm、口径15.6cmを測る中形の甕である。胴部はほぼだ円形で、ひずみやひび割れが数か所に認められる。

玉類 玄案内より、勾玉1、管玉4、小玉71の合計76個の玉が出土している。勾玉は水晶製で下半を欠損している。穿孔は片側から行っており、片面には孔部周辺に浅いえぐりがみられる。

管玉は3点(2~4)が碧玉製、1点(5)がガラス製である。碧玉製のもの、深緑色で長さ20~25mmを測り、いずれも片面穿孔である。ガラス製のもの、長さ15mm、径5mmと小形で断面は角の丸い六角形を呈している。小玉は水晶製1点を除いて全てガラス製である。水晶製小玉は、ほぼ球形で片面から穿孔している。ガラス製小玉は、大きくみて径3~4mm程の小形のもの5mm以上の比較的大形のもの2種あるが、前者が大部分である。色調は大部分が透明感のある薄藍色で、不透明な紺色や青緑色のものもわずかにみられる。



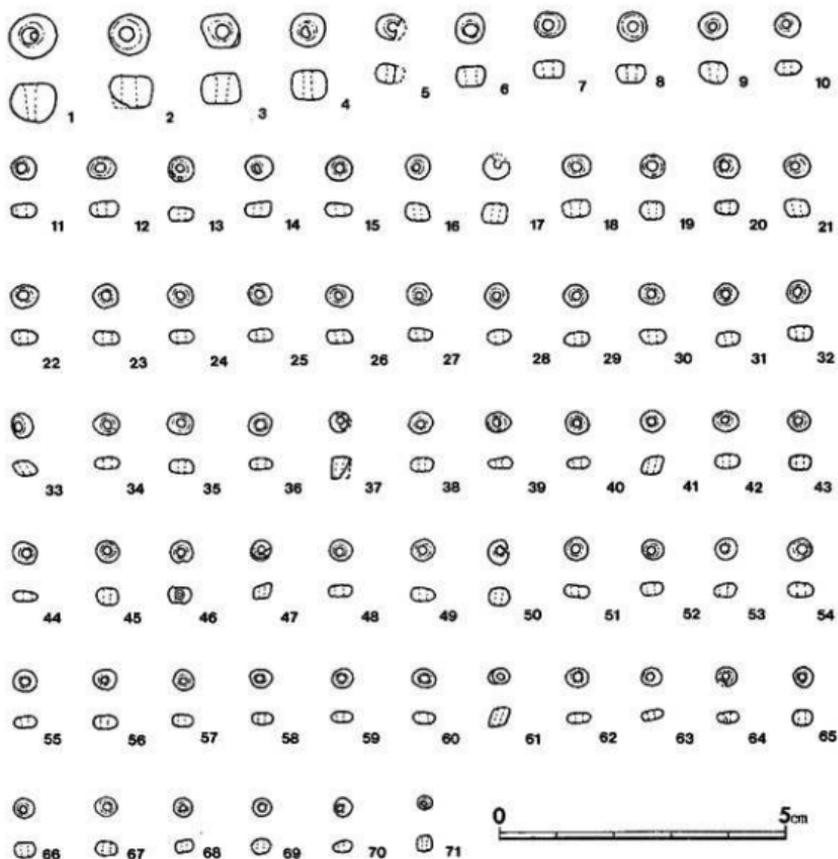
第14図 石室内出土須恵器実測図(2) S=1/4



第15図 石室内出土玉類実測図(1) S=1/2

No.	長さ (mm)	径 (mm)	孔 径 (mm)	材質	色調
2	24.5	8.0×8.5	3.2→1.2	碧玉	暗緑色
3	22.3	9.0×8.6	2.0→1.1	碧玉	〃
4	20.4	6.7×8.0	3.4→1.2	碧玉	〃
5	15.0	5.0	2.2	ガラス	紺

表2 管玉計測表



第16図 石室内出土玉類実測図(2) 実大

表3 石室内出土小玉計測表

No.	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	材質	色調	No.	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	材質	色調
1	8.0	7.0	2.6→1.2	水晶	透明	6	5.3	3.6	2.0	ガラス	青緑色
2	8.0	5.7	2.2-欠損	ガラス	紺色	7	5.3×4.2	3.0	1.9×1.6	*	紺色
3	6.6×6.6	5.4	2.2	*	紺色	8	5.0	2.8~3.0	1.8×1.5	*	*
4	6.0	5.1	1.8×1.2	*	青緑色	9	4.8	2.4	1.5	*	薄藍色
5	(5.5)	3.4	1.2	*	薄藍色	10	4.4	2.4	1.2	*	*

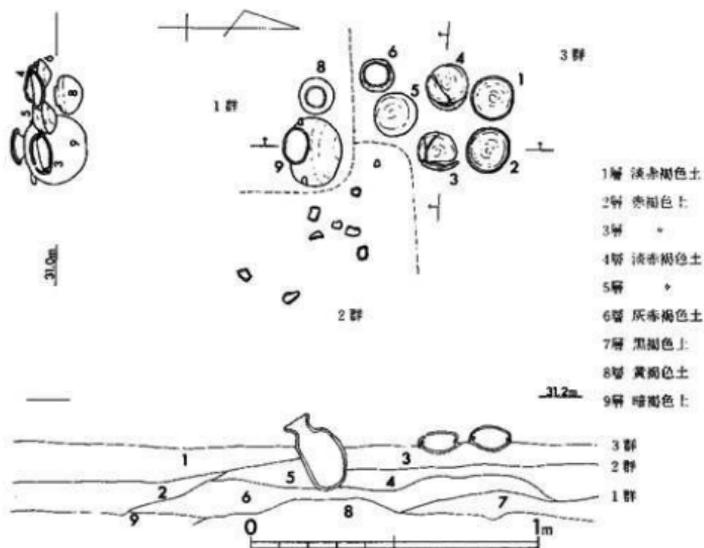
No.	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	材質	色調	No.	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	材質	色調
11	4.2	2.2	1.4	ガラス	薄藍色	42	4.2	2.2	1.2	*	*
12	4.8	2.6	1.8×1.7	*	*	43	3.8	2.4	1.4	*	*
13	4.3	2.2	1.1	*	*	44	4.0	2.0	1.6	*	*
14	4.7	2.5	1.1×2.0	*	黄色	45	4.0	3.0	1.3→1.2	*	*
15	4.5	2.2	1.6	*	薄藍色	46	4.0	2.9	1.4	*	青緑色
16	4.2	3.1	1.2	*	*	47	3.2	2.7	1.2	*	薄藍色
17	4.2	3.4	1.4→1.3	*	紺色	48	4.0	2.1	1.6	*	*
18	5.0×4.0	3.0	1.4	*	*	49	4.0	2.3	1.3→1.2	*	*
19	4.0	3.0	1.5→1.2	*	青色	50	3.8	2.9	1.2	*	*
20	4.1	2.4	1.5	*	薄藍色	51	4.0	2.0	1.4	*	*
21	4.3	3.0	1.2	*	*	52	3.9	2.1	1.2	*	*
22	4.8	2.3	1.5→1.4	*	*	53	3.7	2.2	1.4	*	*
23	4.3	2.4	1.6	*	*	54	4.3	2.4	1.3→1.2	*	*
24	4.1	2.1	1.7	*	青色	55	4.0	2.0	1.5	*	*
25	4.0	2.1	1.4	*	薄藍色	56	4.0	2.3	1.2	*	*
26	4.4	2.1	1.4	*	紺色	57	3.7	2.0	1.2	*	*
27	4.0	2.2	1.2	*	薄藍色	58	3.9	2.0	1.2	*	*
28	4.1	2.3	1.6	*	*	59	3.7	1.9	1.4	*	*
29	4.2	2.3	1.2	*	*	60	3.7	1.9	1.6	*	*
30	4.2	2.3	1.2	*	*	61	3.0	3.0	1.2	*	緑色
31	4.0	2.2	1.4	*	*	62	4.0	1.8	1.2	*	薄藍色
32	4.0	2.7	1.4	*	*	63	3.5	1.7	1.4	*	*
33	4.1	2.5	1.5	*	*	64	3.6	2.0	1.2	*	*
34	4.2	1.8	1.5	*	*	65	3.3	2.8	1.1	*	*
35	4.4	2.3	1.4→1.1	*	*	66	3.7	2.5	1.4	*	薄緑色
36	4.0	2.0	1.6	*	*	67	3.7	2.4	1.2	*	薄藍色
37	3.5	3.5	1.2	*	*	68	3.3	2.1	1.1	*	青緑色
38	4.0	2.3	1.2	*	*	69	3.2	2.4	1.2	*	薄藍色
39	4.0	1.8	1.5×0.9	*	*	70	3.2	2.1	1.2	*	*
40	4.0	2.0	1.6	*	*	71	2.6	2.7	1.0	*	灰色
41	3.5	3.0	1.4	*	*						

### Ⅲ 盛土内遺物

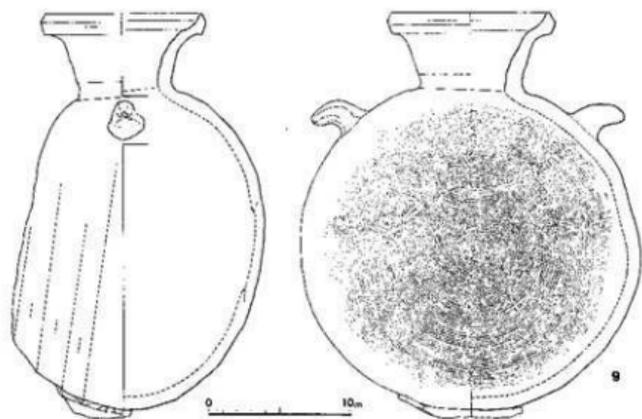
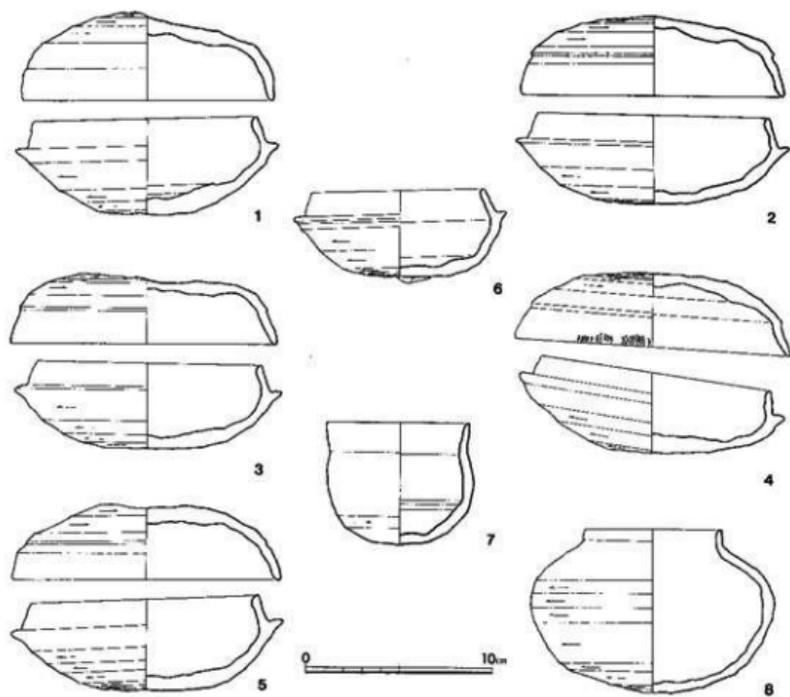
**出土状況** 石室北西隅より北西約2.5 m地点の盛土中（墳丘中軸土層断面の3層下面付近）より須恵器提瓶1、短頸壺1、小壺1、蓋環5セット、坏身1が集中して出土した。これらは、天井石上に一気に盛られた赤褐色土を取り除いた時点で検出したもので、当初は主体部に伴うものと考えて調査を行ったが、平面の精査、断ち割り断面の観察のいずれにおいても土壌等の遺構は全く検出できなかった。

出土須恵器はその出土状況や出土層序の関係から3群に分けられ、しかもそれらが全く同時に置かれたものではなく順次据えられたことが明らかになった。これらの須恵器群の埋置を復元すると以下ようになる。

- (1) 6層上に1群（提瓶、短頸壺）を据え、提瓶の背後（南側）には提瓶を立て支えるために淡赤褐色土（5層）を盛る。
- (2) 1群須恵器の前面（北側）に4層を敷く。
- (3) 4層上に2群（小壺）を破碎して、提瓶の東側を中心に散蒔く。
- (4) 2群須恵器上にさらに赤褐色土（3層）を盛る。
- (5) 3層上、1群須恵器の前面に蓋環5セットとやや小形の坏身一点（3群）を据える。



第17図 盛土内遺物出土状況 S=1/20



第18图 盛土内出土遗物实测图

以上のようにこれらの須恵器は5つの段階を経て埋置されたものであるが、平面的には全く重なりがないことから、この5段階は時間的な隔たりをおいて行われたのではなく、一時に行われたものと考えられる。

さて、これらの須恵器群の性格であるが、2群須恵器小埴を破砕していることや各群を土を盛りながら順次置いていることなどは、一般的な副葬や供獻のあり方とは異なっている。さらに前述した土器等の遺構が全く検出できなかった事実と考え合わせると、これらが主体部に伴う遺物である可能性は薄いと考えられる。現段階でその性格を規定することは不可能ではあるが、盛土途上における何らかの祭祀に伴うものの可能性が考えられよう。

#### 遺物

蓋杯(1~5)は、ほぼ同様の形態、手法をもつ。蓋は口径13.5~14.4cmで、天井部は丸味をもち、口縁はやや外方に向って下りる。天井部と口縁部の境には、かすかに段が残り、口縁端部は丸くおさめて、口縁端内面の沈線はみられない。天井部上半には回転ヘラ削りを施す。杯身は、底部が丸く、内傾する立ち上がりをもち、口縁端は丸くおさめる。6はやや小形の杯身である。これらの蓋杯は、石室内出土の蓋杯に比して若干退化した特徴をもち、両者の間には時間差がある可能性がある。

7は体部と口頸部の間がわずかにくびれる小埴で底部には手持ヘラ削りを施す。

8は大きく膨張した体部に短く直立した口縁をもつ短頸壺で、底部から肩付近まで回転ヘラ削りが施されている。

提瓶9は体部正面観がほぼ円形を呈し、前面は丸く膨らみ、背面は平坦である。体部前面には同心円状のカキメを施し、背面には指頭圧痕が残る。側面はヘラ削りの後、カキメ、ナデを施している。頸部はやや外方に開きながら立ち上がり、口縁付近で大きく開く。口縁外面は台形状をなし、口縁端は上方につまみ上げるようにして丸くおさめる。

表4 墳掘出土須恵器観察表

No.	器種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴	備 考
7-1-1	甕	口径 20.0 胴部径 16.2	口頸部は直立し、口縁付近で外方に開く。口縁端は外面に肥厚させる。	胴部外面、平行タタキ、後カキメ、内面同心円タタキ、口頸部内外面回転ナデ	胎土 石英粒少し含む 焼成 良好 色調 淡灰色 自然釉かかり、肩付近に塵埃片多く付着
7-1-2	同上	底径 10.5	底部は丸味のある平坦面をもつ。	外面平行タタキ、後一部カキメ、内面同心円タタキ	胎土 石英微粒少量含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
7-1-3	同上		口頸はほぼ直立した後、わずかに外方にのびる。	胴部外面平行タタキ 内面同心円タタキ 胴部外面カキメ	胎土 石英微粒少量含む 色調 外面灰褐色 内面黒灰色 焼成 良好 一部自然釉かかる
7-1-4	子持甕	胴部径 9.8 胴部最大径 24.4 子盛くびれ部径 5.5 子盛胴部最大径 6.5	胴部から頸部にかけて中空でつながる。頸部は分厚で輪積により成形。肩部に想定5個の子盛が付属する。	胴部外面平行タタキ後カキメ、内面同心円タタキ、胴部外面ヨコナデ後上下方向のナデ、内面腹面をナデ後下方では上下方向に強いナデ	胎土 石英微粒少量含む 色調 外面灰褐色～黒灰色 内面 黒灰色 焼成 良好
7-1-5	同上	底径 19.3 胴部小径 10.7	頸はわずかに外方へ向って下り、肩部付近で「八」の字状に広がり、脚端は下方に折り返して丸くおさめる。少くとも2段の三角形スカシがあり、脚端上には2列にわたって櫛溝波状文。	外面上方櫛溝のカキメ、下半面回転ナデ部へ削り残る。内面下方回転ナデ上方不定方向ナデ	胎土 0.5mm以下の石英粒少量含む 色調 外面灰褐色 内面淡灰色 焼成 良好
7-1-6	同上		2段以上の三角形スカシ。1条～2条の凹輪にはさまれて、4列以上の櫛溝波状文。	外面回転ナデ、内面上半と下方の強いナデ、下半回転ナデ	胎土 石英微粒を密に含む 色調 外面濃灰色 内面淡灰色 焼成 良好
7-1-7	同上	底径 21	「八」の字状に広がりながら下り、脚端は下方にわずかに折り返して丸くおさめる。スカシあり。櫛溝波状文が一列みとめられる。	内外面回転ナデ	胎土 石英微粒を少々含む 色調 淡灰色～淡褐色 焼成 良好
7-1-8	子持甕	壺部最大径 6.2	壺蓋の天井部に子盛を付着した形。蓋部天井外面と壺部壺部最大径付近に櫛状工具による刺突文。	蓋部内外面回転ナデ、壺部外部外面下カキメ、壺部外面上半、内面回転ナデ	胎土 石英微粒を密に含む 色調 外面灰色～黒灰色 内面淡褐色 焼成 良好 ロクロ左回転
7-1-9	子壺	胴部最大径 6.0 くびれ部径 4.45	肩部に縁があり、胴部は肩から直線的に内側に下りる。肩部下方に櫛状工具による刺突文。	胴部外面カキメ、内面回転ナデ	胎土 石英微粒を多く含む 色調 灰褐色 焼成 良好

表5 石室内出土土器観察表

No.	器種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴	備 考
13 1 1	環 塚	口径 14.55 器高 4.3	天井部は丸味を帯び、口縁部は外下方にのびる。天井部と口縁部の境には段がみられる。	天井部上半回転へう削り、天井部内面らせん状ナデ、のち一定方向ナデ、その他回転ナデ	胎土 2mm以下の石英粒含む 色調 外面 暗赤褐色 内面 淡赤褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 1 2	同 上	口径 14.45 器高 4.96	天井部は丸く、口縁部はやや外下方にのびる。天井部と口縁部の境には段がみられる。口縁部内面には浅い沈線がみられる。	天井部上半回転へう削り、天井部内面らせん状ナデ後不方向ナデ、その他回転ナデ	胎土 2mm以下の石英粒多く含む 色調 淡灰色 焼成 不良 ロクロ 右回転
13 1 3	同 上	口径 14.0 器高 5.1	天井部は丸く、口縁部は内湾気味にやや外下方にのびる。天井部と口縁部の境には段がみられる。口縁部内面には沈線を施し、段状にしている。	天井部上半回転へう削り、天井部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 1mm以下の石英粒多く含む 2mm大のものもわずかに含む 色調 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 1 4	同 上	口径 14.2 器高 4.9	天井部は丸く、口縁部は内湾気味にほぼ垂直に下りる。天井部と口縁部の境には段がみられる。口縁部内面には浅い沈線がみられる。	天井部上半回転へう削り、天井部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 1mm以下の石英粒を含む 色調 淡灰色 焼成 不良 ロクロ 右回転
13 1 5	飯 甕	口径12.1 器高 3.9	天井部には平胴部をもち、外下方にのびて口縁部に至る。口縁部内面には浅い沈線がみられる。	外面上半回転へう削り、下半回転ナデ、内面らせん状回転ナデ	胎土 石英粒多く含む 色調 白灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 1 6	環 塚	口径 12.6 受部径 14.8 器高 5.05	底部は丸く、立ち上がりは内傾した後ほぼ垂直にのび、端部にはわずかに縁がみられる。	底部下半回転へう削り、底部内面らせん状ナデ後一定方向のナデ、その他回転ナデ	胎土 3mm以下の石英粒少々含む 色調 淡赤褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 1 7	同 上	口径 12.4 受部径 14.55 器高 5.3	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。	底部下半回転へう削り、その他回転ナデ	胎土 石英粒多く含む 色調 外面 濃赤灰色 内面 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 1 8	同 上	口径 12.1 受部径 14.4 器高 4.7	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。底部に「メ」のへう記号あり。	底部下半回転へう削り、底部内面らせん状ナデ後一定方向にナデ、その他回転ナデ	胎土 石英粒含む 色調 外面 黒灰色～灰褐色 内面 黒灰色 焼成 やや良 ロクロ 右回転
13 1 9	短 頸 壺	口径 8.5 胸部最大径 12.0 底径 6.3 器高 9.4	胴部は最大径が上位にあり、底部には平胴部をもつ。口縁はほぼ垂直にしてのび、端部は丸くおさめる。	底部は回転へう削り、腰部上半カキメ、口縁部、体部内面回転ナデ	胎土 石英粒少々含む 色調 棕色 焼成 やや良 ロクロ 右回転

13 10	子持 蓋	蓋部口径 13.0 蓋部高 5.0 弁部口径 16.0 蓋体部最大径 5.55 器高 14.3	環蓋の天井に匙形小蓋が付着した形。 蓋部は天井部と口縁部を2本の沈線で仕切る。蓋部口縁端外面。蓋部くびれ部にはヘリを押しつけて施文。蓋部領部、体部に磨蝕痕状文。蓋天井に刺文。	回転ナデ	胎土 石英粒を密に含む 色調 明紫褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
13 11	匙	口径(推定) 12.8 胸部最大径 9.5 くびれ部径 4.35 刃径 4.6 器高 13.35	体部はやや割張りし、底部は平底。口縁は次第に外方へ開きながらのび、段をもって、口縁に至る。体部最大径付近に円孔を設け、その周囲に磨蝕工具で刺突を施す。	体部下方向回転へり削り、その他回転ナデ	胎土 1mm以下の石英粒を含む 色調 外面 黒灰色 内面 暗赤褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
14 12	甕	口径 15.5 胸部最大径 28.8 頸径 11.8 器高 34.6	体部はだ円形で、ひずみやひび割れが各所にみられる。口縁はまず直立し、段次第に外方に開きながら底部に至る。口縁端外面はわずかに肥厚させる。	体部外面平行タタキ後のキメ、内面同心円タタキ、口縁部内外面回転ナデ	胎土 石英粒を密に含む 色調 淡灰色 焼成 良好 一部自然熱かかる

表6 盛土内出土須恵器観察表

No.	器種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	調 整 の 特 徴	備 考
1	環蓋	口径 13.5 器高 4.7	天井は丸く、口縁部は外下方にのびる。天井部と口縁部の境界はほとんど認められない。	天井部上方向回転へり削り、天井部内面らせん状回転ナデ、その他回転ナデ	胎土 1mm以下の石英粒を含む 色調 外面 褐色 内面 淡褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
1	杯身	口径 12.0 受け部径 14.0 器高 3.4	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。口縁端はやや分厚になり丸くおさめる。	底部大方向回転へり削り、底部内面らせん状回転ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英粒多く含む 色調 外面 淡灰色 内面 淡褐色 焼成 良好 ロクロ 右回転
2	環蓋	口径 14.1 器高 4.1	天井部は丸く、口縁部は外下方にのびる。天井部と口縁部の境には段がみられる。	天井部大方向回転へり削り、天井部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 3mm以下の石英粒多く含む 色調 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
2	杯身	口径 12.5 受け部径 14.6 器高 5.0	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。口縁端はやや分厚になり、丸くおさめる。	底部方向回転へり削り、底部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 3mm以下の石英粒多く含む 色調 外面 自然熱かかり黒緑色 内面 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
3	環蓋	口径 14.25 器高 3.8	天井部は平直で、口縁部は外下方にのびる。天井部と口縁部の境には、わずかに段がみられる。	天井部大方向回転へり削り、天井部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英粒多く含む 色調 外面 淡灰色 内面 紫灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転

3	坏身	口径 12.0 受部径 14.2 器高 4.7	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。口縁端部は丸くおさめる。	底部下半回転ヘラ削り、底部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒多く含む 色調 外面 灰色 内面 紫灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
4	坏置	口径 12.7×14.2 器高 4.75	天弁部は丸く、口縁部の外下方にのびる。天弁部と口縁部の境には1条の沈線を描す。口縁部外面には、ヘラ状工具を押しつけて施文。全体に歪みが著しい。	天弁部上半回転ヘラ削り、天弁部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒を少々含む 色調 黒灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
4	坏身	口径 10.9×12.5 受部径 14.35 器高 5.2	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の歪みが著しい。	底部下半回転ヘラ削り、底部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒多く含む 色調 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
5	坏置	口径 14.4 器高 4.05	天弁は丸いが頸部はやや凹む。口縁部は外下方にのび、天弁部と口縁部の境には、不明瞭ながら段がみられる。	天弁部下半回転ヘラ削り、天弁部内面回転ナデ、後不定方向ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒を少量含む 色調 淡灰色 焼成 良好 ロクロ 右回転
5	坏身	口径 12.15 受部径 14.45 器高 5.2	底部は丸く、立ち上がりは内傾してのびる。口縁端はやや分厚になり丸くおさめる。	底部回転ヘラ削り、その他回転ナデ	胎土 石英微粒を少量含む 色調 淡灰色 (外面には薄く自然釉かかる) 焼成 良好 ロクロ 右回転
6	坏身	口径 9.3 受け部径 11.35 器高 4.8	底部は丸く立ち上がりは内傾してまっすぐのびる。底部に土器片付着。	底部下半回転ヘラ削り、底部内面らせん状ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒を少量含む 色調 淡灰色 (外面一部に自然釉かかる) 焼成 やや良 ロクロ 右回転
7	小埴	口径 7.7 くびれ部径 7.35 胴部最大径 7.8 器高 6.1	底部は丸く、胴部と口縁部との境はわずかにくびれる。口縁部はわずかに外へ開いてほぼまっすぐのび、口縁端は丸くおさめる。	底部回転ヘラ削り、胴部下半～底部回転ヘラ削りのも回転ナデ、その他回転ナデ	胎土 石英微粒を少量含む 色調 淡灰色 (内、外面に自然釉付着) 焼成 やや良 ロクロ 右回転
8	灰須衣	口径 7.3 胴部最大径 13.9 器高 8.8	底部は平底で、胴部はよく剛が張る。口縁部は短く直立する。	口部以下回転ヘラ削り、底部より上は回転ヘラ削り後回転ナデ、内面底部は指で押さえる	胎土 石英微粒を多く含む 色調 淡褐色 焼成 やや良 ロクロ 右回転
9	提瓶	口径 11.8 くびれ部径 7.1 胴部径 23.9 胴部最大径 16.6 器高 28.1	胴部正面縦線は正円。筒部は丸く膨らみ背面には平凹面をもつ。側面胴部にカキ状把手つく。胴部は外に開いてのび、口縁付近でさらに開き、口縁端は上方につまみ上げる。	胴部以下回転ヘラ削り、筒部、ナデ、指部を直焼する。側面ヘラ削りのもナデ、カキメ、口部回転ナデ	胎土 石英微粒を少々含む 色調 灰～黒灰色 焼成 良好

## 第4章 自然科学分野の分析

### 岡田薬師古墳の墳丘版築状互層および石室の敷粘土の残留磁気

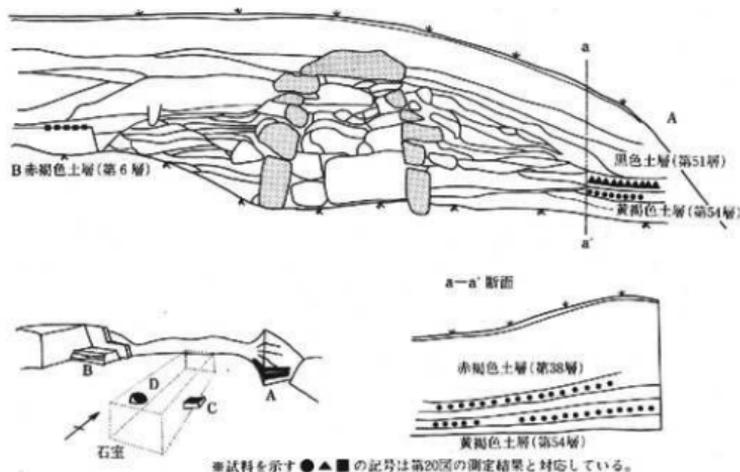
島根大学理学部 時枝克安 河本直子 伏見良夫

#### (1) はじめに

地磁気中で加熱された粘土は、地磁気の方角を向いた安定な熱残留磁気を帯びる。このような熱残留磁気の性質を利用した考古地磁気法によって、今まで、多くの古竈跡等の年代測定が行われてきた。しかし、この調査で対象となるのは、焼土の熱残留磁気ではない。地磁気中で粘土に、熱ではなく、応力が作用した場合に生じる残留磁気である。もし、このような残留磁気の方角から、応力が作用したときの地磁気の方角を復元できれば、焼土の場合と同様にして、焼けていない粘土遺物の年代を求めることができる。この方法が実現すれば、考古学にとって大変興味深いものとなるだろう。このように、我々は、粘土遺物の年代測定を研究目的の一つとして、応力が作用した粘土遺物の自然残留磁気の性質を調べている。

#### (2) 遺跡と試料

岡田薬師古墳の墳形は方墳であり、石室は南に開口している。また、築造年代は、出土した須恵器の様式から六世紀後半と推定されている。発掘によって石室を覆う盛土断面に褐色土および黒色



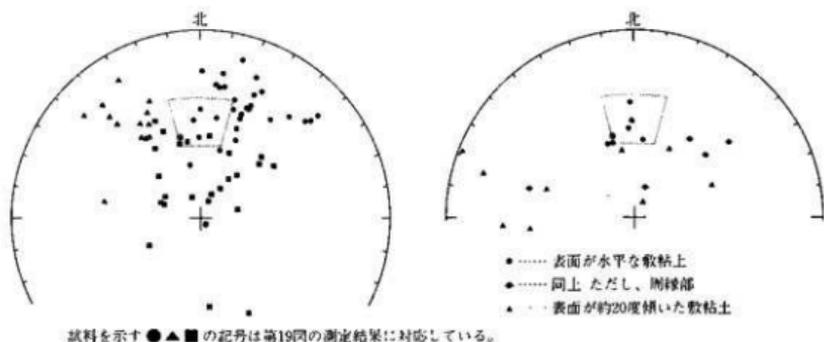
第19図 墳丘版築互層の断面と定方位試料採取位置

土の版築状互層構造が露出された。各層の土質はいずれも軟らかく、十分な叩き締めが行われていないことを示している。第19図から分るように、盛土は、石室の側面を埋める下部盛土と、その上部を覆う上部盛土から成っている。定方位試料は、図のA部の下部盛土では、下から順に、黄褐色土層（第54層）、黒色土層（第51層）、赤褐色土層（第38層）から、また、B部の上部盛土では、赤褐色土層（第6層）から、合計85個を採取した。墳丘の試料を採取中に、石室を構成する石組が取り除かれ、側壁の石塊の下に敷かれていた粘土ブロックが露出された。敷粘土は乾燥しており、石室の荷重によって固く押しかためられていた。これらの敷粘土のうち、C部の表面が平坦なものとD部の約20度の勾配をもったものから、それぞれ12個と10個の定方位試料を採取した。

### (3) 残留磁気の測定結果と考察

採取した試料は、一辺が約3cmの立方体に整形した後、無定方位磁力計によって、残留磁気の方向と強度を測定した。

**墳丘版築状互層の残留磁気の方** 第20図に墳丘盛土の残留磁気の方の測定結果を示す。試料のうち4個は破損のため、14個は磁気的非均質性のため省略している。残留磁気の方の方向は著しく乱れており、それらの分散範囲は過去2000年間の地磁気の変動範囲をはるかに越えている。しかし、残留磁気の方の分布の仕方には、採取した場所によって傾向があり、大きく分けると、三つのグループに別れて分布している。すなわち、下部盛土について見ると、二枚の褐色土層（最下層の黄褐色土層（第54層）と三番目の赤褐色土層）では、残留磁気の方の方向がステレオ投影図の第一象限にあるけれども、これらの褐色土層の間にはさまれた黒色土層（第51層）では第二象限に分布している。また、石室を隔てた所にある上部盛土の赤褐色土層（第6層）では第一象限と第二象限の中間に分布している。そして、三つのグループに共通する特徴として、残留磁気の平均方向が、遺跡の



第20図 墳丘版築状互層の残留磁気の方

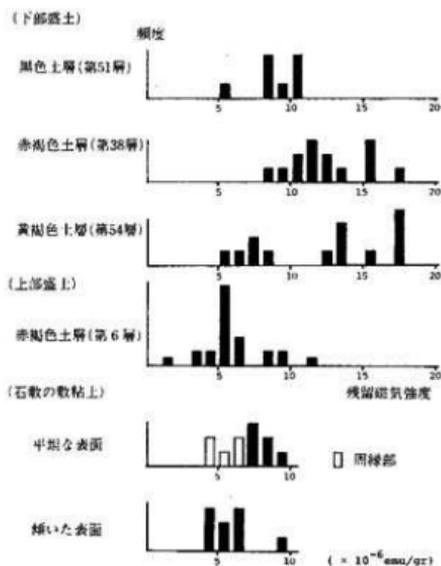
第21図 石室の敷粘土の残留磁気の方

点線の窓は過去2000年間の地磁気の方の変動範囲を、◎はA. D. 600の地磁気の方を示す。

推定年代である六世紀後半での地磁気の方向からかなり偏っていることが上げられる。

さて、島根県出雲市の大念寺古墳発掘調査<sup>11,2)</sup>によれば、墳丘盛土断面は、堅く締まった黒色粘砂層と褐色粘土層の版築状互層構造を示しており、透水層と不透水層を交互に組み合わせることによって、効率の良い排水を意図し、墳丘の崩壊を防いだものと指摘されている。岡川菜師古墳の墳丘盛土を構成している黒色土と褐色土を比較すると、黒色土の方が粘度が低く、透水的である。また、黒色土層（第51層）には細い草の根が多量に認められたが、一つ上層の褐色土層では、逆に少ない。さらに、盛土表面から黒色土層（第51層）の試料採取地点までの距離は、互層構造を横切る鉛直方向よりも、黒色土層に沿った水平方向の方が短い。これらの事柄から、草の根は墳丘盛土の横腹から水平な黒色土層に沿って侵入したと推定できる。一方、青木（1972）による実験によれば、磁場中で火山灰上に水を浸透させると、磁性鉱物の再配列によって、火山灰上の磁化方向が、磁場の方向に揃うという結果が導かれている。したがって、二枚の褐色土層にはさまれた黒色上層の残留磁気の方向が第二象限に飛び離れている原因は、墳丘側面から水平な黒色土層中を伝わって侵入した水分の助けを借りて、層中の磁性粒子が地磁気との相互作用で再配列し、残留磁気の方向が現在の地磁気の方に引きずられたためと考えている。また、同じ褐色土層でありながら、残留磁気の方の分布が、下部盛土の二つの層と石室を隔てた上部盛土とで一致しないのは、墳丘築造時、上層に作用した力が弱く、方向も一定でなかったために残留磁気の方が広範囲にわたっては揃わなかったものと解釈している。

**石室の敷粘土の残留磁気の方 第21図**に、石室の敷粘土の残留磁気の方を示す。表面が傾斜した敷粘土について、残留磁気の方は極端に乱れている。これに反して、表面が水平な敷粘土では、周縁部から採取された試料を除くと、残留磁気の方はかなり良くまとまっている。敷粘土の周縁部で残留磁気の方の乱れているのは、縦壁の不連続性による応力の変化のためと考えられる。したがって、残留磁気の方、粘土に作用する応力が表面に垂直な圧力である場合には揃うが、平行な応力の場合には乱れると結論できる。さて、敷粘土の残留磁気は、静的に作用した力の効果を示し



第22図 残留磁気ヒストグラム

ている。遺跡の推定年代である六世紀後半での地磁気の方向と、表面が水平な敷粘土の残留磁気の平均方向（周縁部を除く）とを比べると、図-3に示すように、両者は一致していないが、相互のずれは、衝撃力に加えられた他の遺跡の例ほど大きくはない。したがって、地磁気と応力残留磁気の方向の間の離反角は、衝撃力の場合には大きいですが、静的に作用する圧力では比較的小さいと言える。

**残留磁気強度の比較** 第22図に示された残留磁気強度の傾度分布から、盛土および敷粘土の残留磁気について、方向の集中度が良い方が、強度が強いことが分る。すなわち、下部盛土の褐色土層（第38層と第54層）と上部盛土の赤褐色土層（第6層）の残留磁気について、方向の分散の程度を示す Fisher の95%誤差角は、それぞれ6.9度と10度となり、前者の方が集中度が良い。また、強度は、前者（ $5 \times 10^{-5} \sim 2 \times 10^{-5}$  emu/gr）が、後者（ $1 \times 10^{-5} \sim 1 \times 10^{-5}$  emu/gr）より強い。敷粘土の残留磁気についても、方向の集中度が良い方が強度が大きい傾向がある。残留磁気の方角と強度についての同様の関係は神門寺境内廃寺の測定結果にも認められている。

#### (4) まとめ

岡田薬師古墳の粘土についての測定結果を要約すると次のようになる。

- (1) 残留磁気の平均方向は古墳築造時の地磁気の方角と一致しない。
- (2) 静的な圧力が粘土に作用する場合、残留磁気と地磁気の方角の離反角は小さくなる。
- (3) 粘土の表面に垂直な圧力は残留磁気の方角を揃えるが、平行なずり応力は乱す。
- (4) 残留磁気の方角の集中度の増加につれて、強度は強くなる。
- (5) 残留磁気の方角は、二次的な浸水時の地磁気の方角に変化する傾向がある。

現在の研究段階では、これらの測定結果を、直ちに、粘土遺物の年代に結びつけることはできない。しかし筆者は、遺跡の実測例と条件を制御した実験結果の比較によって、年代測定だけでなく、過去の地磁気強度の測定や作用した応力分布の解析が可能になると考えている。最後に、貴重な試料の供給と遺跡の図面の使用について便宜を図っていただいた鳥根県教育委員会、文化課文化財保護主事 川原和人氏 鳥根県教育文化財団文化財主事 丹羽野裕氏に厚く感謝する。

#### 参 考 文 献

- (1) 史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書(1984) 出雲市教育委員会
- (2) 川原和人(1983) 史跡今市大念寺古墳発掘調査概報 考古学ジャーナル 226:19-21
- (3) Y. Aoki(1972) A post depositional magnetization mechanism of sediments and its application to geophysical problems. Thesis. Dr., Geophysical Institute, Univ. of Tokyo
- (4) R. A. Fisher(1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A217:295-305
- (5) 中島正志、夏原信義(1981) 考古地磁気年代推定法 ニューサイエンス社
- (6) 神門寺境内廃寺(1985) 出雲市教育委員会

## 第5章 ま と め

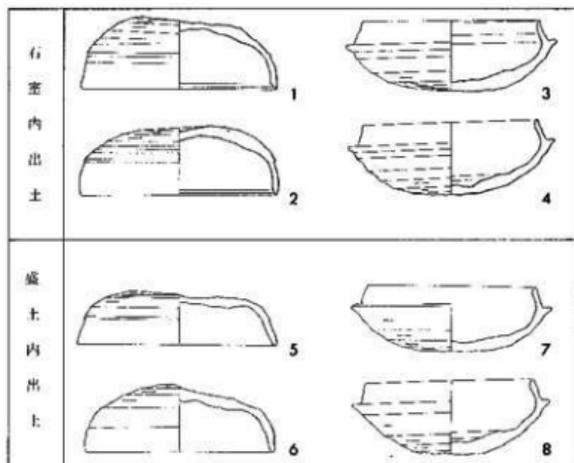
### 時期

岡川薬師古墳からは、時期を知る手がかりとなる須恵器は、石室内、墳丘盛土内、墳丘東側溝の3ヶ所より出土している。そのうち墳丘東側溝からは、甕、子持壺など時期の決定しにくい須恵器しか出土していないため、ここでは石室内と盛土内出土の須恵器、特に蓋環を取り上げて比較検討してみたい。

まず石室内からは、坏蓋4点、坏身3点の他、短頸壺、甕、子持壺蓋、甕が出土している。玉類の出土状況や羨道部の甕の据えた状態から、追葬があったことがうかがえるが、出土須恵器、特に蓋環には時期差がうかがえるほどの型式的ちがいはみられない。蓋の特徴は口径14～14.5cmとやや大形で丸い天井部から、低いながらも明瞭な段をもって口縁部につながり、口縁端面には沈線を施す。(第23図)特に1は口縁端面に段に近い形で沈線が施されている。坏身は底部は丸く、口縁部は内傾して立ち上がり、途中でやや粗曲気味に上方にのび、端部に至る。

一方、盛土内出土の蓋は、天井部と口縁部の境の段が不明瞭になり、6のようにほとんど段がないものもみられる。また口縁端面の沈線もみられない。坏身は受部から立ち上がりにかけてやや分厚になり、石室内出土のものに比して、口縁端部にかけてのシャープさが失われている。

以上のように、石室内出土須恵器と盛土内の須恵器との間に型式差がみられ、石室に須恵器が副葬された時期が盛土中に須恵器を置いた時期に若干先行すると考えられる。これらの須恵器を従来の山陰須恵器編年に対応させると、両者ともほぼⅢ期の範疇に入るものといえる。しかし、石室内出土の須恵器は、前段階の



第23図 石室内・盛土内出土蓋環

古い特徴を残しているものもあり、Ⅲ期の中でも比較的早い時期に位置づけられよう。よって本古墳の築造はおおよそ6世紀後半代と考えられ、少くとも初葬は当該期の中でも若干古い時期で、6世紀中葉に近い時期と考えられる。

### 石室

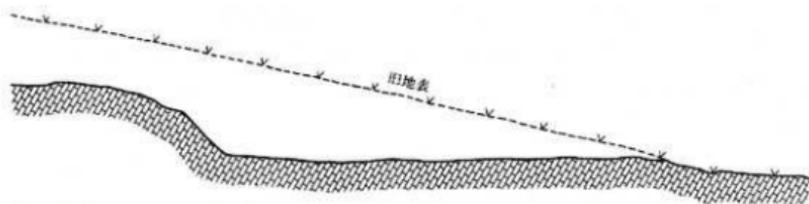
本古墳では主体部として、狭長で無袖形の横穴式石室が輸出された。しかも側壁の中央付近を大きく持ち送って羨道と玄室の区分を行うという、非常に特殊な形態の石室である。こうした石室の類例を横穴式石室から求めてみたい。現在、本古墳周辺の横穴式石室を持つ古墳としては、松江市坂本町の薄井原古墳<sup>2</sup>や松江市南郊の岡田山<sup>3</sup>-号墳、御崎山古墳<sup>4</sup>が知られているが、そのいずれも片袖、もしくは両袖式で、玄室と羨道では天井の高さが大きく違い、本古墳の石室とは全く異っている。また出雲地方山間部では、本古墳と同様の無袖形の横穴式石室が分布しているが、大きく距離を隔てた両地域を直接結びつけることは、現状では困難である。一方、松江市大垣町の鍛冶屋谷<sup>5</sup>3号墳の主体部は、推定長4.8m、奥壁部の幅77cm、高さ58cmの非常に小形の無袖形横穴式石室状のもので、より小形ではあるが本古墳石室と類似しており、同じ湖北地域であることとあわせて注目される。

さて、本古墳周辺の湖北地域（鳥根半島部の宍道湖～中海北岸地域）の古墳には、竪穴式石室が比較的新しい時期まで主体部として用いられるものがある。5世紀末の松江市西川津町金崎1号墳<sup>6</sup>、菅田丘古墳<sup>7</sup>（磯棚）、6世紀前半代の鹿島町奥才1号墳<sup>8</sup>、副葬品用の小形の石室ながら平田市国富町上島古墳<sup>9</sup>などがそれである。こうした状況は県内の他地域ではみられず、湖北地域の特徴と考えられるが、これは岡田薬師古墳石室の系譜を考えるうえで一つの材料となるであろう。本古墳の石室規模は全長3.3m以上、奥壁部の幅1.1m、高さ1.04mで、金崎1号墳や奥才1号墳のそれとほぼ同様で、しかも側壁に持ち送りはあるものの羨道側を壁でふさいでしまえば、竪穴式石室によく似た石室となる。特に奥才1号墳とは時期も近いいうえ、小口部の壁（奥壁）を若干持ち送って側壁にのせ、力石状に組み合わせるなど、本古墳の石積方法に類似した点がみられる。これらのことから本古墳の石室は、前代の竪穴式石室の系統をひくもの可能性も考えられる。とすれば、本古墳の石室は、横穴式石室を受容するのに際して従来の葬法をひきつぎ、在地的に変容させた形の横穴式石室と理解することができよう。前述の鍛冶屋谷3号墳は、その変容がいっそう進んだものと考えられる。

### 石室・墳丘築成

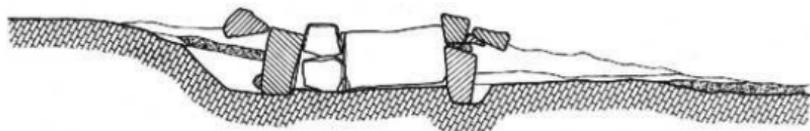
本古墳の調査においては、石室を完全に解体し、それに伴って墳丘の完全な断ち割りを行ったので、石室の構築から墳丘の築成までの工程の大略を把握することができた。それを復元すると以下のようになる。

1. 自然地形（地山）の高い部分を削り、さらに石室を構築するための平坦面（石室の掘り方）を削り出す。



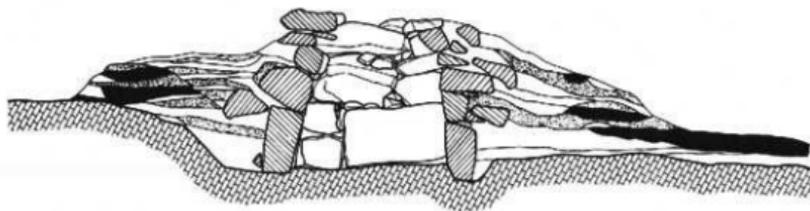
第24図 石室・墳丘築成1段階模式図

2. 石室の掘り方内に、さらに一部根石の掘り方を掘り、根石を据え、その裏側に盛土を行って石を固定する。その際、一部には石の裏込めや控え積を行ってより強固にする。



第25図 石室・墳丘築成2段階模式図

3. 根石の上方に石を積み上げ、壁体の背後には要所に裏込めや控え積を行うと同時に周囲に盛土を行い、石室を中心とした小墳丘を形づくる。盛土は、黒色土・黄褐色粘土・赤褐色土（地山と同じ土）を版築状に交互に固めながら盛り、石室を壁体の背後から強化する。石積は概して、あまり厚みのない石を小口積状に積むのを基本としている。



第26図 石室・墳丘築成3段階模式図

4. 天井石をのせ、石室周囲の小墳丘をおおうように墳丘全体に盛土を行い、天井石のレベルにそろえて平坦面を形成する。この際、盛土は石室周囲のような、ていねいな版築状のものではなく、比較的粗雑な盛り方をしている。



第27図 石室・墳丘築成4段階模式図

5. 石室北西隅より約2.5 m北西部分に、前述の須恵器を盛土を少しずつ行いながら据える。墳丘築成最終段階での何らかの祭祀に関連すると考えられる。

なお、4段階とこの5段階目の祭祀行為の間には若干の時間差があった可能性がある。というのは、前述したように石室内出土須恵器と墳丘内出土須恵器の間に型式差が認められるからである。とすれば、少なくとも初葬後しばらくの間は、墳丘は未完成のままであったことになる。

6. 厚さ45~50cmにわたって、地山の赤褐色土を一気に盛り上げ、墳丘を完成させる。

さて、こうした石室、墳丘の築造方法に類似しているのが、山口県下関市岩谷古墳である。岩谷古墳では、石室を被覆する第1次墳丘がていねいに築かれ、さらにその上に第2次墳丘を盛り上げたもので、その工程は岡田薬師古墳と近似している。また前述の金崎1号墳では、石室を築造しながら赤褐色土と暗褐色~黒褐色土を互層状に積み上げている。石室、墳丘を完全に調査した例が少なく、確言はできないものの、3段階にみられるようなていねいな互層状の盛土手法は、石室の構築と深く関わっているようである。

#### 墳丘内祭祀

今回の調査では、盛土途中において何らかの祭祀が行われた可能性を指摘できた。従来墳丘における祭祀というと、くびれ部や造出部の祭祀が目されてきた程度で、こうした盛土途中における祭祀についての実態は明らかではないといえよう。

本古墳においては、前述の古墳築成6段階の直前、すなわち墳丘を最終的に完成させる直前に、墳丘頂部で何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。その性格について言及することは現状では困難であるが、前述したように石室内出土須恵器に比してこの盛土内出土須恵器が若干新しい特徴を備えていることはそれを考えるうえでのヒントになると考えられる。このことは、石室内に最初の埋葬が行われてからしばらくの間（おそらくは追葬が終わるまでの間）、最終的な封土は行われなかったことを示す。また盛土内の須恵器は、土を盛りながら順次置かれており、封土との関連性をうかがわせる。とすると、この最終的な封土を盛る行為（墳丘築成における6段階）は、5段階の須恵器を据置散蒔する行為と相まって、単に墳丘を完成させる意味以上に、何らかの祭祀的行為を内

包しているように思える。たとえば、石室への埋葬が完全に終了した後、死者あるいは霊を封じ込めるような祭祀の意味が、墳丘築成の最終段階に含まれていると考えられないだろうか。

ところで、このような祭祀のあり方と近似した例が前述の下関市岩谷古墳にみられる。岩谷古墳では、石室を被覆する第1次墳丘が盛られた後、その裾部の2ヶ所に須恵器大甕が据えられ、さらにその上に第2次墳丘を盛り墳丘を完成させている。須恵器のあり方に若干の相違はあるものの、墳丘と祭祀との関係は本古墳と極めてよく似ており注目される。

いずれにせよ、調査例が増加し、こうした墳丘における祭祀についても研究が進んでいくことが期待されよう。

### 註

- (1) 山本清 「山陰の須恵器」 『島根大学開学10周年記念論文集』 1960
- (2) 島根県教育委員会 「薄井原古墳調査報告」 1962
- (3) 山本清 「岡山山古墳」 『島根県文化財調査報告』 第5集 1968  
門脇俊彦 「岡山山古墳群」 『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』 1975
- (4) 山本清 「御崎山古墳」 『島根県文化財調査報告』 第5集 1968  
勝部昭 「御崎山古墳」 『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』 1975
- (5) 井上躬介 「松江・鍛冶屋谷古墳群」 『島根県埋蔵文化財調査報告書』 第IV集 1972
- (6) 松江市教育委員会 「史跡 金崎古墳群」 1977
- (7) 山本清 「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」 『山陰文化研究紀要』 第17号 1977
- (8) 鹿島町教育委員会 「奥才古墳群」 1985
- (9) 池田満雄 「出雲上島古墳調査報告」 『古代学研究』 第10号 1954
- (10) 山口県教育委員会 「下関市岩谷古墳発掘調査報告」 1972



岡田薬師古墳遺望(北より)



調査中の遺望(南より)



墳丘(北東より)



墳丘東裾遺物出土状況



墳丘東西断面(石室上)



墳丘南北断面



石室上面(天井石除去前)



天井石(北より)



天井石目張りの状況



石室内土砂充填の状況



石室上面(天井石除去後)



石室奥壁



石室左壁



玄室部分より羨道方向を眺む



奥壁と左壁の関係



奥壁と左壁の関係



石室右壁



奥壁と右壁との関係



石室右壁



石室床面敷石



控え積の状況(右壁)



控え積の状況(左壁)



石室内玄室部分遺物出土状況



羨道部分遺物出土状況及び石室内土層断面



排水溝内石組



石室左壁後背土層断面(1)



石室左壁後背土層断面(2)



石室奥壁後背土層断面



石室右壁後背土層断面



石室右壁後背土層断面



墳丘中軸東西断面



墳丘中軸東西断面(石室西側)



墳丘中軸東西断面(石室東側)



石室横石及び掘り方(南より)



石室根石及び掘り方(北より)



根石裏込の状況



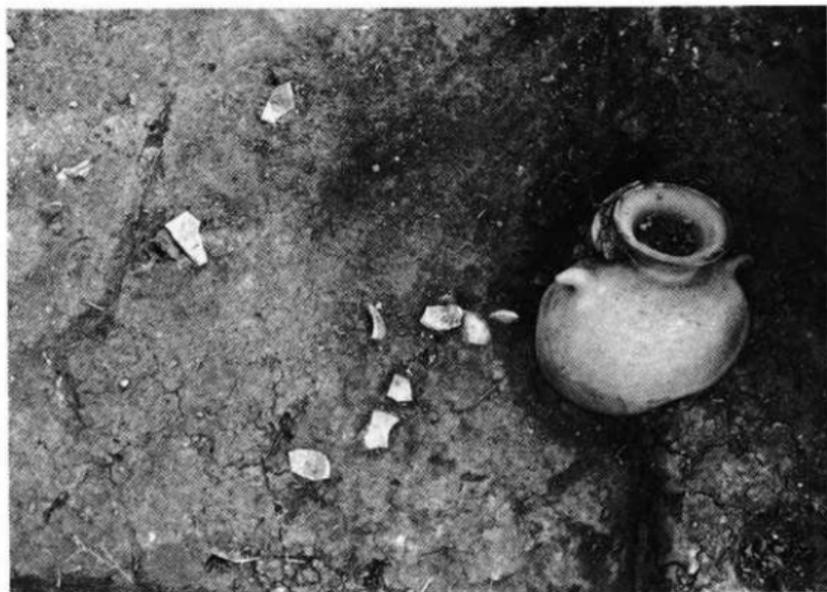
盛土内遺物出土状況(3群蓋環類)



盛土内遺物出土状況(3群・蓋を外した状態)



盛土内遺物出土状況(3群 北より)



盛土内遺物出土状況(2群 破砕小埴)

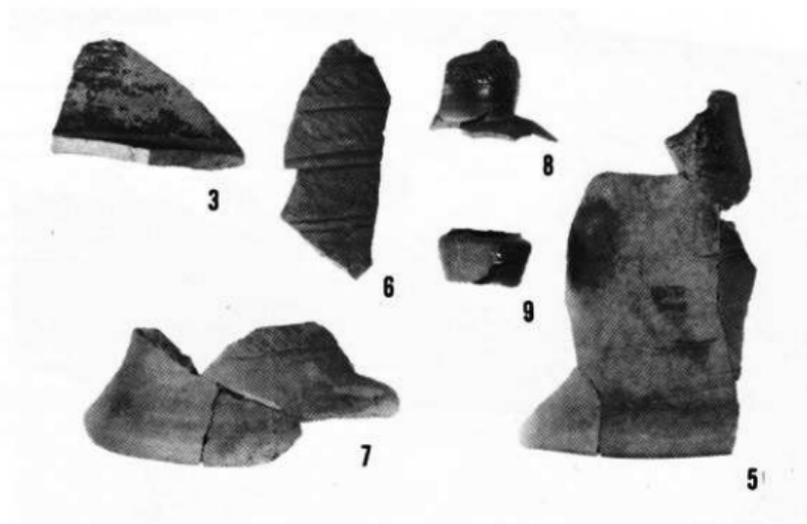
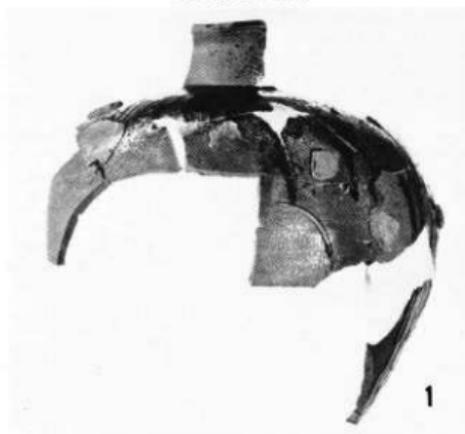


盛土内遺物出土状況(1群 短頸壺)



盛土内遺物出土土層

墳丘裾部出土遺物





1



2



3



4



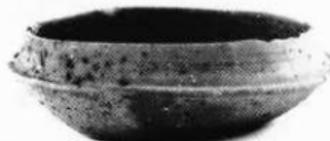
5



6



7



8

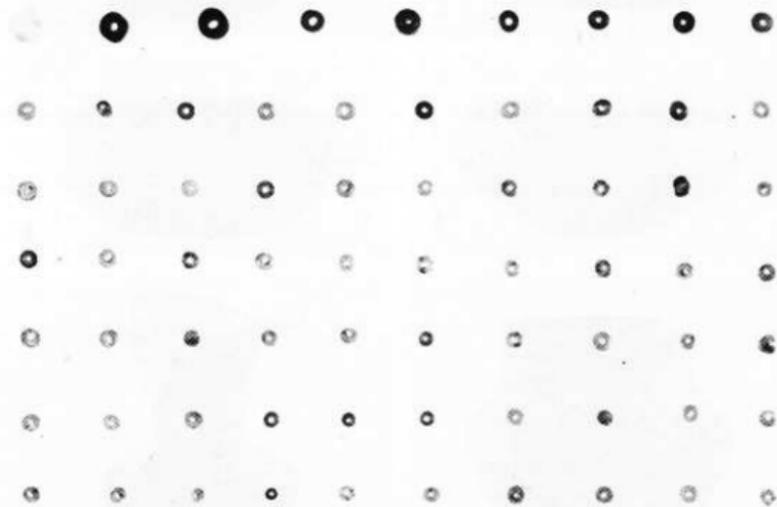


9



11

石室内出土遺物



石室内出土遺物



1-1



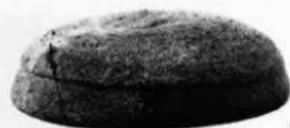
1-2



2-1



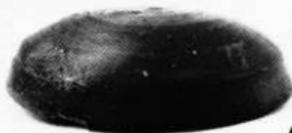
2-2



3-1



3-2



4-1



4-2



5-1



5-2



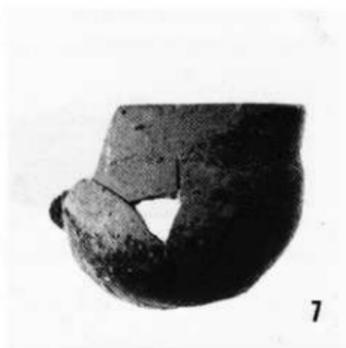
6



8



9



7

盛土内出土遺物

---

岡田栗師古墳調査報告書

昭和61年 3月

発行 島根県教育委員会

印刷 報光社  
平田市平田町993

---